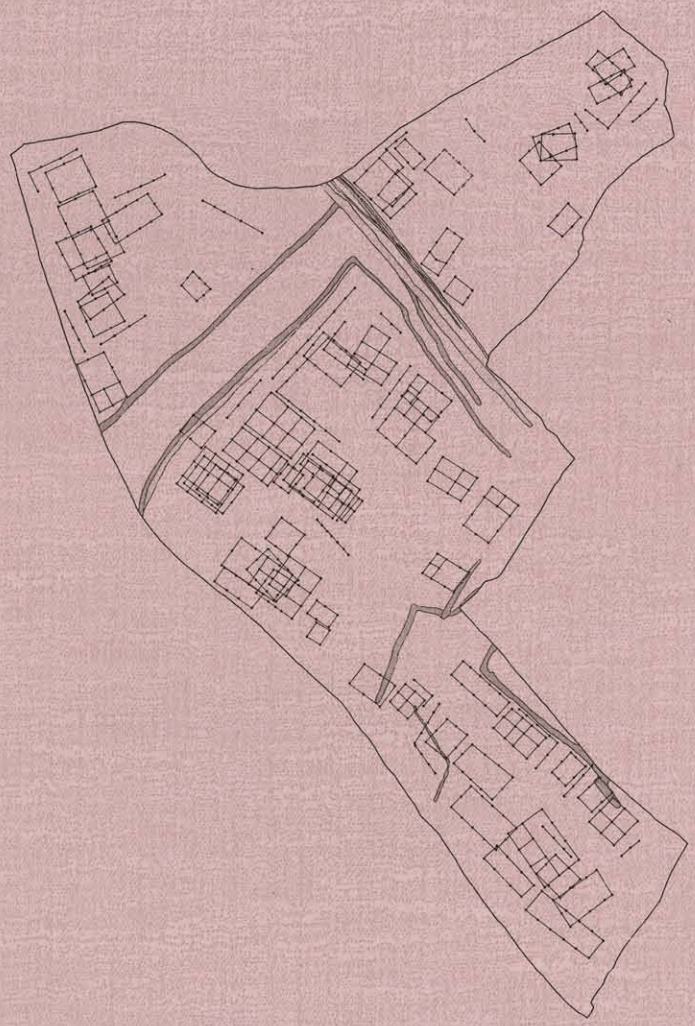
佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集

岩井口遺跡 Ⅱ

県道本郷・斗賀野停車場線改良工事に伴う発掘調査報告書



1995.3

高知県佐川町教育委員会

岩井口遺跡 Ⅱ

県道本郷・斗賀野停車場線改良工事に伴う発掘調査報告書

1995.3

高知県佐川町教育委員会

岩井口遺跡（南上空より）

岩井口遺跡（南上空より）

調査区全景（南東上空より）

調査区全景（上空より）

A区全景（上空より）

B区全景（上空より）

A区遺構検出状態（北より）

A区遺構完掘状態（北より）

A区遺構検出状態（南より）

A区遺構完掘状態（南より）

B区遺構検出状態（北より）

B区遺構完掘状態（北より）

B区遺構検出状態（南より）

B区遺構完掘状態（南より）

序

文教の町として知られる佐川町には国の史跡である不動ガ岩屋洞穴遺跡を始めとして県の指定文化財など数多くの遺跡，文化財が所在しております。今回調査した岩井口遺跡は，平成2年度に実施した県営圃場整備事業に伴う事前の試掘調査で確認された遺跡で，平成4年度に本調査（第1次調査）を実施しています。

今回の調査は県道本郷・斗賀野停車場線改良工事に伴うもので第2次調査となります。この岩井口遺跡からは13世紀から14世紀にかけての在地領主の館跡が確認され，度賀野氏の居館であった可能性も考えられ注目されます。

埋蔵文化財は，古代住民の生活様式を解明するだけではなく，未来へ伝えるべき貴重な文化遺産でもあります。しかし，近年の各種の開発事業に伴い，一朝にして貴重な遺跡が破壊される恐れがあり，憂慮すべき事態がしばしば発生していますが，今回の調査にあたっては開発当局の深いご理解により記録保存のための発掘調査及び整理作業を終えることができました。

本書の刊行により，歴史ある佐川町の貴重な資料としてまた県内はもとより広く埋蔵文化財の研究の一助になれば幸いと思っております。

最後に，本調査を担当していただいた高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員廣田佳久氏を始め，ご指導いただいた高知県教育委員会，（財）高知県文化財団，そして文化財への暖いご理解とご協力をいただいた越知土木事務所，調査にご協力下さった地元関係者及び地域住民の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

佐川町教育委員会

教育長　國貞富滋

例言

1. 本書は，佐川町が高知県の委託を受け平成5年度に実施した岩井口遺跡の発掘調査報告書である。委託業務名は県道本郷・斗賀野停車場線道路改良に伴う岩井口遺跡記録保存委託業務であった。
2. 発掘調査は，高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと佐川町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は，佐川町教育委員会の依頼を受け，高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員廣田佳久が担当し，調査においては同センター調査員山崎正明の補助を得た。調査の事務，総括は佐川町教育委員会社会教育係が当たり，同係長山本静男が行った。
4. 本書の執筆，写真撮影，編集等は廣田佳久が行った。
5. 遺構については，SB（掘立柱建物跡），SA（塀跡又は柵列跡），SK（土坑），SD（溝跡），P（ピット），SF（畝状遺構）で表示し，各遺跡，各地区ごとの通し番号とした。なお，遺構番号は各遺構とも三桁で表示し，A区が101～，B区が201～それぞれ始めている。また，掲載している遺構の平面図等の縮尺は原則として縮尺1/60で行っており，方位（N）は真北である。なお，掘立柱建物跡や塀跡及び柵列跡などの柱穴で構成された遺構は縮尺1/200で模式図を掲載し，確認した柱穴は●，未検出の柱穴は○で表記している。
6. 遺物については，原則として土師質土器，瓦質土器，中世陶磁器，輸入陶磁器，土製品，石製品が縮尺1/3，柱痕が縮尺1/6で実測図を掲載している。ただし，中には縮尺を変更しているものもあるが，それぞれに縮尺を記している。実測図の番号は，各遺跡，各地区ごとの通し番号で，図版の番号と一致している。
7. 発掘調査に当たっては，平成4年度に実施した同遺跡の任意のトラバース測量の成果に基づく基準点を使用した。標高についても平成4年度に実施した水準測量の成果を使用し，海抜高を示す。なお，トラバース測量は真北を基準として，Nは真北を示している。
8. 調査に当たっては，高知県越知土木事務所，高知県教育委員会，佐川町文化財保護審議会委員の方々並びに地元関係者の方々に全面的協力をいただいた。また，下記の方々に洗浄，注記，接合，復元，遺物の実測，トレースなど整理作業で協力していただき，同センターの諸氏からは貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。
   中西純子　西内宏美　小松経子　矢野雅　井上博恵　前田玲子　田村美鈴
9. 整理事業では、瀬戸・瀬戸系の遺物について愛知県陶磁資料館仲野泰裕主任学芸員，財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター山下峰司氏及び同センター松澤和人氏から貴重な助言をいただいた。記して謝意を表わす。
10. 出土遺物は，「93-10SI」と注記し，佐川町教育委員会において保管している。なお，第1次調査に当たる平成4年度に調査した分については「92-24SI」と注記し，同所にて保管している。

目次

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1. 契機と経過 …… 1

2. 調査日誌抄 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の地理的，歴史的環境

1. 地理的環境 …… 3

2. 歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　調査の概要

1. 調査の方法 …… 9

2. 調査区の概要 …… 10

第Ⅳ章　遺構と遺物

1. A区 …… 17

2. B区 …… 28

第Ⅴ章　考察

1. 岩井口遺跡の性格とその時代 …… 37

2. 館跡の位置付けとその意義 …… 40

挿図

Fig. 1　発掘調査風景
Fig. 2　佐川町位置図
Fig. 3　斗賀野地区周辺遺跡分布図
Fig. 4　岩井口遺跡範囲図
Fig. 5　調査地区周辺地形図
Fig. 6　岩井口遺跡トラバースポイント配置図
Fig. 7　岩井口遺跡調査区全体図
Fig. 8　A区西壁セクション図
Fig. 9　A区第Ⅱ層出土遺物実測図
Fig.10　B区西壁セクション図
Fig.11　B区第Ⅳ層出土遺物実測図
Fig.12　SB−101
Fig.13　SB−102
Fig.14　SB−103
Fig.15　SB−104
Fig.16　SB−105
Fig.17　SB−106
Fig.18　SB−107
Fig.19　SB−108
Fig.20　SB−109
Fig.21　SB−110
Fig.22　SB−111
Fig.23　SB−112
Fig.24　SB−113
Fig.25　SB−114
Fig.26　SB−115
Fig.27　SB−116
Fig.28　SB−117
Fig.29　SB−118
Fig.30　SB−119
Fig.31　掘立柱建物跡出土遺物実測図
Fig.32　SK−103
Fig.33　SK−106
Fig.34　SD−101
Fig.35　SD−103
Fig.36　土坑，溝跡出土遺物実測図
Fig.37　ピット出土遺物実測図
Fig.38　SB−201
Fig.39　SB−202
Fig.40　SB−203
Fig.41　SB−204
Fig.42　SB−205
Fig.43　SB−206
Fig.44　SB−207
Fig.45　SB−208
Fig.46　SK−201
Fig.47　SK−202・204・205
Fig.48　SD−201・202
Fig.49　SD−203
Fig.50　溝跡，畝状遺構出土遺物実測図

表

Tab.1　斗賀野地区周辺の遺跡地名表
Tab.2　岩井口遺跡 掘立柱建物跡計測表（第1次調査）
Tab.3　トラバース測量座標成果一覧表
Tab.4　岩井口遺跡 塀跡計測表（第1次調査）
Tab.5　岩井口遺跡 掘立柱建物計測表（第2次調査）
Tab.6　岩井口遺跡 塀跡計測表（第2次調査）

図版

巻頭図版１　岩井口遺跡（南上空より）
　　岩井口遺跡（南上空より）
巻頭図版２　調査区全景（南東上空より）
　　調査区全景（上空より）
巻頭図版３　A区全景（上空より）
　　B区全景（上空より）
巻頭図版４　A区遺構検出状態（北より）
　　A区遺構完掘状態（北より）
巻頭図版５　A区遺構検出状態（南より）
　　A区遺構完掘状態（南より）
巻頭図版６　B区遺構検出状態（北より）
　　B区遺構完掘状態（北より）
巻頭図版７　B区遺構検出状態（南より）
　　B区遺構完掘状態（南より）
PL.１　調査前全景（北より）
　　調査前全景（南より）
PL.２　調査区全景（南上空より）
　　調査区全景（上空より）
PL.３　A区遺構完掘状態（上空より）
　　B区遺構完掘状態（上空より）
PL.４　A区遺構検出状態（北より）
　　A区遺構完掘状態（北より）
PL.５　A区遺構検出状態（南より）
　　A区遺構完掘状態（南より）
PL.６　SB—101（北より）
　　SB—102～104（南より）
PL.７　SB—106（北より）
　　SB—107・108（南西より）
PL.８　SB—109（南西より）
　　SB—110，SA—101（南西より）
PL.９　SB—111（南西より）
　　SB—113・114（北西より）
PL.10　SB—114（南西より）
　　SB—114・115・118（南西より）
PL.11　SB—117・119（西より）
　　SB—117・119（南より）
PL.12　SB—101の北東隅の柱穴（北より）
　　SK—103（南より）
PL.13　SK—106検出状態（南より）
　　SK—106完掘状態（南より）
PL.14　SD—101（北より）
　　SD—103（東より）
PL.15　SB—108遺物出土状態（12）
　　SK—103遺物出土状態（22）
PL.16　SD—103遺物出土状態（24）
　　P—102遺物出土状態（28）
PL.17　B区遺構検出状態（北より）
　　B区遺構完掘状態（北より）
PL.18　B区遺構検出状態（南より）
　　B区遺構完掘状態（南より）
PL.19　SB—201，SD—201～203（南より）
　　SB—202（南より）
PL.20　SB—203，SA—202（西より）
　　SB—204・205（西より）
PL.21　SB—206（西より）
　　SB—208，SA—203（西より）
PL.22　SK—201（西より）
　　SK—202（南より）
PL.23　SD—203（北より）
　　SD—203（北より）
PL.24　SD—201遺物出土状態（11）
　　SD—201遺物出土状態（16）
PL.25　土師質土器（杯）
　　土師質土器（小皿）
PL.26　柱根
　　東播系須恵器（こね鉢）
PL.27　土師質土器
PL.28　土師質土器，砥石，瀬戸系，土錘

PL.29　柱根，青磁（碗），柱状片刃石斧

付図

付図１　岩井口遺跡A区遺構平面図（S=1:200）
付図２　岩井口遺跡B区遺構平面図（S=1:200）
付図３　岩井口遺跡（館跡）遺構配置図（S=1:500）

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1. 契機と経過

岩井口遺跡は，平成2年度に実施した佐川町斗賀野（とかの）地区県営圃場整備事業に伴う事前の試掘調査によってその所在が確認された遺跡である。そして，平成4年度には本調査を実施し，弥生時代の竪穴住居跡や中世の在地領主のものとみられる館跡を確認した。それについては『岩井口遺跡，二ノ部遺跡・城跡』（佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第Ⅰ集）として報告している。

この圃場整備事業にリンクする形で隣接する県道本郷・斗賀野停車場線の改良工事も計画されており，圃場整備が完了した後の平成6年度に工事が実施されることになっていた。県営圃場整備に伴う発掘調査（第1次調査）の際，遺跡の性格や状況について担当部局にも説明し，十分な理解を頂き，工事に先立つ平成5年度に事前の本調査を実施することになった。遺跡の状況が平成4年度に実施された調査によってほぼ判明しているため調査は対象地の全面発掘とした。

調査は，平成5年度に佐川町が高知県（越知土木事務所）の委託を受け，佐川町教育委員会が調査主体となり高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと実施した。調査対象となったのは遺跡範囲の内工事によって影響を受ける部分である。調査期間は平成5年6月21日から9月10日までの実働34日間であった。

2.調査日誌抄

1993年6月21日から9月10日

6.21　本日より発掘調査を開始する。調査区を横断する水路を境に館の内側に当たる部分をA区，館の外側に当たる部分をB区とし，A区より調査を実施する。

6.22　A区の土層の掘削に併行して遺構検出を行う。

6.23　本日は雨天のため発掘調査を中止する。

6.24　A区の土層の掘削に併行して遺構検出を行う。

6.25　本日はA区の土層掘削と遺構検出を行うが，午後から雨天のため調査を中止する。

6.28　現場事務所を設置する。なお，現場作業は雨天のため中止する。

6.29　本日も雨天のため現場作業は中止する。雨天の合間にTP-5から節点を事務所脇に設ける。

6.30　本日も雨天のため現場作業は中止する。

7. 1　本日も雨天のため現場作業は中止する。

7. 2　本日も雨天のため現場作業は中止する。

7.5　本日はB区の土層掘削と遺構検出を行い，遺構検出作業を完了する。

7. 6　本日は雨天のため現場作業を中止する。

7. 8　A・B区に昨年設置した基準点から基に杭打を行う。

7. 9　遺構の略図を作成する。

7.12　遺構の再精査を行い遺構検出状態の写真撮影を行う。B区については光の関係で明日再度行うこととした。

7.13　B区の遺構検出状態の写真撮影を再度行った後，遺構の調査に移る。まず，B区から実施する。

7.14　主に館を囲む溝跡の調査を実施する。館の外の遺構の中には近世以降のものも含まれている。

7.15　B区の溝跡の調査に引き続きピットの調査に移る。また，遺構セクションを実測する。

7.19　B区の土坑並びにピットの調査を行う。また，土層セクションの測量を行う。

7.20　B区のピット並びに畝状遺構の調査を行う。調査区北側では検出面が粘土質であり，遺構はほとんどみられない。また，地形は北に向って傾斜している。

7.21　B区の再精査を行い，遺構調査後完掘状態の写真撮影を南と北から行う。

Fig. 1　発掘調査風景

7.22　B区の完掘状態の写真撮影を再度行い，A区の調査に移る。

7.23　A区の遺構の調査を行う。遺構はほとんどがピットであり，建物跡等に伴う柱穴とみられる。

7.26　A区の遺構の調査を行うとともに遺構の断面を実測する。

7.27　本日は雨天のため現場作業を中止する。

7.28　本日も雨天のため現場作業は中止する。

7.29　本日も雨天のため現場作業は中止する。

7.30　本日も昨夜来の台風による雨のため現場作業は中止する。

8. 1　本日も雨天のため現場作業は中止する。

8. 3　本日は1週間ぶり現場作業を行う。水汲み後，遺構の調査に移る。

8. 4　本日はA区中央部の調査並びに遺構セクションと調査区西壁のセクションを実測する。

8. 5　本日もA区中央部の遺構の調査並びに調査区西壁，遺構バンクセクションの実測と写真撮影を行う。

8. 6　本日もA区の遺構の調査を実施するが，天候不順のため途中で現場作業は中止する。

8. 9　本日も天候不順のため現場作業は中止する。

8.10　本日は台風のために現場作業は中止する。

8.11　A区遺構の水汲み後遺構の調査を行う。調査遺構はピットが中心であった。また，中世の柱穴に弥生時代の扁平片刃石斧が混入していた。

8.12　引き続き遺構の調査を行う。調査遺構はすべてピットであり，炭窯とみられる土坑の上面で検出したピットは平板で測量し，炭窯とみられる土坑の調査に備える。

8.13　炭窯とみられる土坑，ピット等残りの遺構の調査を行いA区の遺構の調査を完了する。

8.17　A区の水汲み並びに精査を行い，新たに検出された遺構を調査した後完掘状態の写真撮影を南と北から行う。

8.19　A区の写真撮影を再度行う。引き続き，遺構実測のための準備を行う。

8.20　本日から遺構の平面実測を行う。午後から雨天のため作業を中止する。

8.23　本日もB区の遺構の平面実測を行う。

8.25　本日もB区の遺構の平面実測を行い，B区の平面実測を完了する。

8.26　A区の遺構の平面実測に取りかかる。埋蔵文化財センターの所長が現場視察に来られる。

8.27　A区の遺構の平面実測を行う。約半分を完了する。越知土木事務所々長が現場視察に来られる。

8.31　引き続き遺構の平面実測を行う。

9. 1　出土遺物を埋蔵文化財センターに運搬する。

9. 4　昨夜襲来した台風13号によって崩壊した現場事務所の後片づけを行う。

9. 6　遺構に溜った水と泥を除去後残っていた平面実測を行い，平面実測を完了する。

9. 7　本日からレベル実測を行う。

9. 8　B区のレベル実測を完了し，A区に移る。

9.10　A区の残りのレベル実測を行い，調査をすべて完了する。

第Ⅱ章　遺跡の地理的，歴史的環境

1. 地理的環境

佐川町は，高知県の中西部に位置し，行政区画では高岡郡に属す。東を日高村と土佐市，南を須崎市，西を葉山村，北を越知町の2市1町2村と境を接し，周囲を四国山地の支脈に囲まれた盆地となっている。集落は大きく黒岩，佐川，尾川，斗賀野，加茂に分かれており，東西13.2km，南北12.8km，総面積は101.21km^2，人口は15,454人（平成6年11月現在）を有し，江戸時代以来代々の文教重視政策により宮内大臣田中光顕をはじめ，牧野富太郎そのほか多くの著名な文教人が輩出し，以来文教の町として知られている。また，江戸時代城主山内一豊から佐川領を賜った主席家老深尾和泉守重良に従って佐川に来た御酒屋以来の伝統を受け継いだ醸造が今日まで続けられており，土佐を代表する蔵元となっている。この他にも，国の史跡不動ガ岩屋洞穴遺跡，国の重要文化財大乗院薬師如来像，県の名勝である青源寺と乗台寺の庭園をはじめ多くの指定文化財を保有している。

この佐川町を地理的にみれば，東経133°17′，北緯33°30′に位置し，仁淀川の支流によって形成された沖積平野と四国山地の支脈である山間部からなる盆地地形をなす。河川でみると大きく二つに分かれ，一つが東流する日下川流域の加茂地区，残る一つが北流する柳瀬川流域の地区で，下流より黒岩，佐川，尾川そして斗賀野地区がある。また，柳瀬川には春日川（佐川地区），尾川川（尾川），斗賀野川（斗賀野）の支流が流れる。町の南方には蟠蛇森（769m），虚空蔵山（675m）の山々が連なり，そこを源とする柳瀬川の流れに添って地勢は北にやや傾斜している。一方，加茂地区は佐川地区の東側の山を源とする日下川の流れに沿って地勢はやや東に傾斜している。

今回調査の対象となった斗賀野地区は，丁度佐川地区の南に位置し，周囲を山に囲まれた盆地地形をなすが，佐川地区のそれに比べ裾野の広い虚空蔵山に抱かれており，開けた印象を受ける。この盆地には虚空蔵山を源とする斗賀野川及びその支流である伏尾川，幸田川があり，これら河川は北西方向に向かって流れており，地勢もそれに添って傾斜している。遺跡も標高が高い南部に多く，標高が低くなる北部では遺跡はほとんど確認されておらず，以前は低湿地地帯であったものと考えられる。低湿地であったが故に良質の粘土が形成され，その粘土が古代以降須恵器生産さらには瓦産業に結びついたのであろう。今回対象となった遺跡は，この斗賀野盆地の北西端部に岩井口遺跡，中央部に二ノ部遺跡・城跡，東端部に上美都岐遺跡，南東部にテラ川遺跡がそれぞれ所在する。

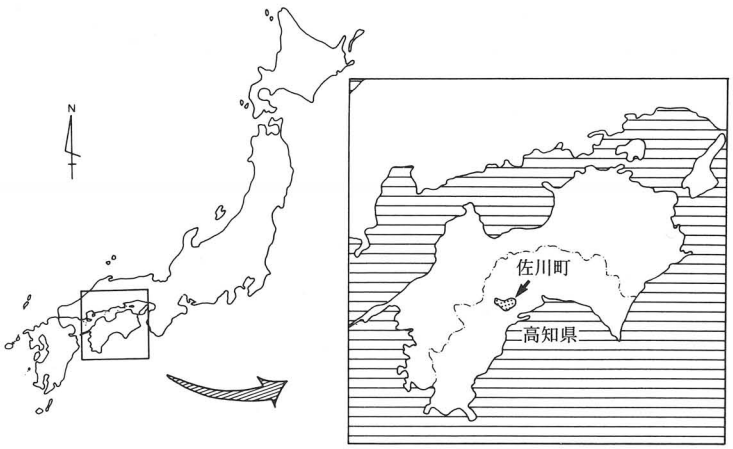


Fig. 2　佐川町位置図

2. 歴史的環境

佐川町の歴史は国の史跡である不動ガ岩屋洞穴遺跡に始まり，現代のところ79遺跡が確認されている。高岡郡の中では土佐市に次ぐ遺跡数を誇る。高知県の場合，南国市を中心とする高知平野，中村市を中心とした四万十川下流域，安芸川，伊尾木川のある安芸平野に遺跡の大半が所在しており，それ以外にあって佐川町のように比較的多くの遺跡が確認されているところは少ない。また，奈良・平安時代の遺跡は先の地域にあっても比較的少なく，特に古代窯業跡は生産地が限定され県下的にみても少なく，10地区足らずが確認されているに過ぎず，その中の1地区が佐川町に所在することは注目すべきことであろう。以下，確認されている遺跡を中心に時代を追って佐川町の歴史をみてみることにする。

現在確認された中で最も古い遺跡は，先述の不動ガ岩屋洞穴遺跡である。丁度岩井口遺跡とは山を挟んだ反対側に位置する。昭和39・41年に調査され，縄文時代草創期から早期の遺物が検出された。特に，当時日本最古の土器の一つに考えられていた細隆起線文土器の出土は注目され，昭和53年12月19日国の史跡に指定されている。最近では，この土器より遡るとみられる豆粒文土器が十和村十川駄馬崎遺跡から出土しており，縄文時代では県下で2番目に古い遺跡となっている。不動ガ岩屋洞穴遺跡から約3km柳瀬川を下った左岸の岩陰からも縄文時代早期の押型文土器が発見されており，城ノ台遺跡として町指定の史跡となっている。その他にも柳瀬川の下流域の黒岩地区では黒原遺跡，坂東遺跡，西ノ芝遺跡，中ノ芝遺跡，岬遺跡などの縄文時代早期から前期にかけての遺跡や庄田遺跡，太田川遺跡などの縄文時代後期の遺跡が丘陵上や段丘上で発見されている。縄文時代後期の遺跡は佐川町各地で確認されているが，大半が遺物単独の出土であり，その詳細については不明である。県下の昨今の発掘調査では，立地条件の決して良いとは思われない谷筋などからも遺構が検出されており，今後新たな発見も十分期待できるのではなかろうか。

弥生時代の遺跡では，今回の遺跡以外に佐川地区中央部で町道工事の際発見された假又遺跡があり，発掘調査で確認された唯一の遺跡である。ここからは弥生時代前期新段階の土器が出土し，現在のところ弥生時代では最も古い遺跡となっている。また，先述の一ツ渕遺跡からも粘土採取の際弥生時代後期後半の土器が比較的まとまって出土している。これ以外の遺跡は，遺物の単独出土が多く，性格は判然としないが，永野遺跡などからは中期とみられる石包丁が発見されており，弥生時代前期新段階以降弥生時代を通じ居住地となっていたものと推察される。中でも後期後半に最も遺跡数が多く，弥生時代の中で最も繁栄した時期であったとみることができよう。

この弥生時代を過ぎ古墳時代になると遺跡は全く確認されなくなる。当然，古墳時代となり生活に変化が生じ，居住地が移動したことにより遺跡数の減少も十分考えられるが，全く居住しなくなったとは考え難く，将来発見される可能性も捨てきれないであろう。ただ，古墳などは全く存在しない。

律令制度になると徐々に遺跡数が増加してくる。現在確認されている遺跡は佐川地区の南東部に位置する永野から斗賀野地区にかけて集中している。この時代に関連して，当地には猿丸太夫の伝承が残っており，町史跡に指定された伝猿丸太夫の墓が現存する。墓は五輪塔となっているが，形態からみて近世初頭のものとみられ，直接関連したものとは考えられない。因みに，猿丸太夫は通

称で，実名は弓削浄人広方といい道鏡の弟でもあり，宝亀元年（770）土佐に配流されたと伝えられるが，配流地は確かではなく，また，没したところも定かではない。ただ，墓のある場所は猿丸山といわれその名が今日まで伝えられている。実際，遺跡として確認されているものは，芝ノ端窯跡，花ノ木窯跡，円能ケタキ窯跡，堂ヶ端窯跡など須恵器窯跡が4ヶ所と今回県営圃場整備事業に伴う試掘調査で確認した上美都岐遺跡などがある。上美都岐遺跡は，本調査がまだ実施されていないため，詳細は不明であるが，官衙関連遺跡ではないかとみられ注目される。また，この遺跡のある斗賀野地区には先の国衙領や大坪などの古代名称も残り，条理制が施行されていた可能性も考慮される。

中世以降は平成4・5年度に実施された遺跡詳細分布調査によってその数が増え，分布状況も比較的把握しやすく，「佐伯文書」を始めとしていくつかの古文書も現存し，人間の活発な活動が見受けられる。まず，現況で最も確認しやすい城館跡をみてみると，現在20ヶ所が確認されており，時期的には南北朝時代からとみられ戦国期のものが数的には多いものと推察される。各地区に残存し，黒岩地区には平野城跡，菖蒲城跡，黒岩城跡，陣ヶ奈路城跡，八幡城跡，フスボリ城跡，佐川地区には中山館跡，城ノ台城跡，神明山城跡，三野土居跡，沖之古城跡，佐川城跡，松尾城跡，加茂地区には長竹城跡，斗賀野地区には二ノ部城跡，伏尾城跡，木陰山城跡，尾川地区には尾川城跡，小森城跡，城台山城跡がそれぞれ所在する。このうち城主が伝えられるものもあり，黒岩城主の片岡氏，松尾城主の中村氏，尾川城主の近沢氏，二ノ部（斗賀野）城主の米森氏などが知られている。中でも，松尾城は佐川四郎左衛門に始まり，津野氏の縁族佐川越中守，中山信家，中村越前守信義，片岡出雲，久武内蔵介と城主が代々代わっており，佐川城に久武氏が移るまで佐川の中心的な城であった。現状では二つの郭を中心に，二ノ段，三ノ段，物見台，竪堀20条以上，堀切14条などが残存し，他の城跡とは比較にならないほどの規模を誇っている。なお，どの遺構がどの城主の代に造られたものかは未調査のため定かではない。一方，文献から中世をみてみると元弘3年（1333）に黒岩氏の名が見え，南北朝時代には佐伯文書に佐河（佐川）四郎左衛門入道と度賀野又太郎入道が南朝方としての姿を現す。今回報告する岩井口遺跡と二ノ部遺跡も正にこの時期が舞台となっている。これ以外にも城跡の周辺でこの時期の集落遺跡が散見される。このように展開してきた佐川も元亀2年（1571）には西進してきた長宗我部氏に降伏し，筆頭家老久武氏を中心とした体制に組み込まれ，城も松尾城から佐川城に移り，中世も最終段階に入ってくる。天正17・18年（1589・1590）には長宗我部氏による検地が行われ，それぞれ所領が決められるが，慶長5年（1600）長宗我部氏が滅亡し，翌慶長6年（1601）土佐24万石の城主山内氏の主席家老深尾氏が佐川入城により，中世の終焉そして近世へと移り変っていく。

江戸時代は深尾氏の佐川領1万石として繁栄を遂げていく。遺跡としては佐川城跡が元和2年（1616）一国一城令により廃城となるが石垣など近世の城の面影を留め，土居跡（通称御土居）も当時のものとみられる石垣が現存する。その他，中世から続く寺跡の所在を各地区で確認することができる。

以後，明治22年4月市町村制施行により佐川，斗賀野，尾川，黒岩，加茂村ができ，同33年に佐川村が町制を施行し，昭和29年には賀茂村を除く1町3村が合併，同30年に賀茂村の一部を合併し今日に至っている。

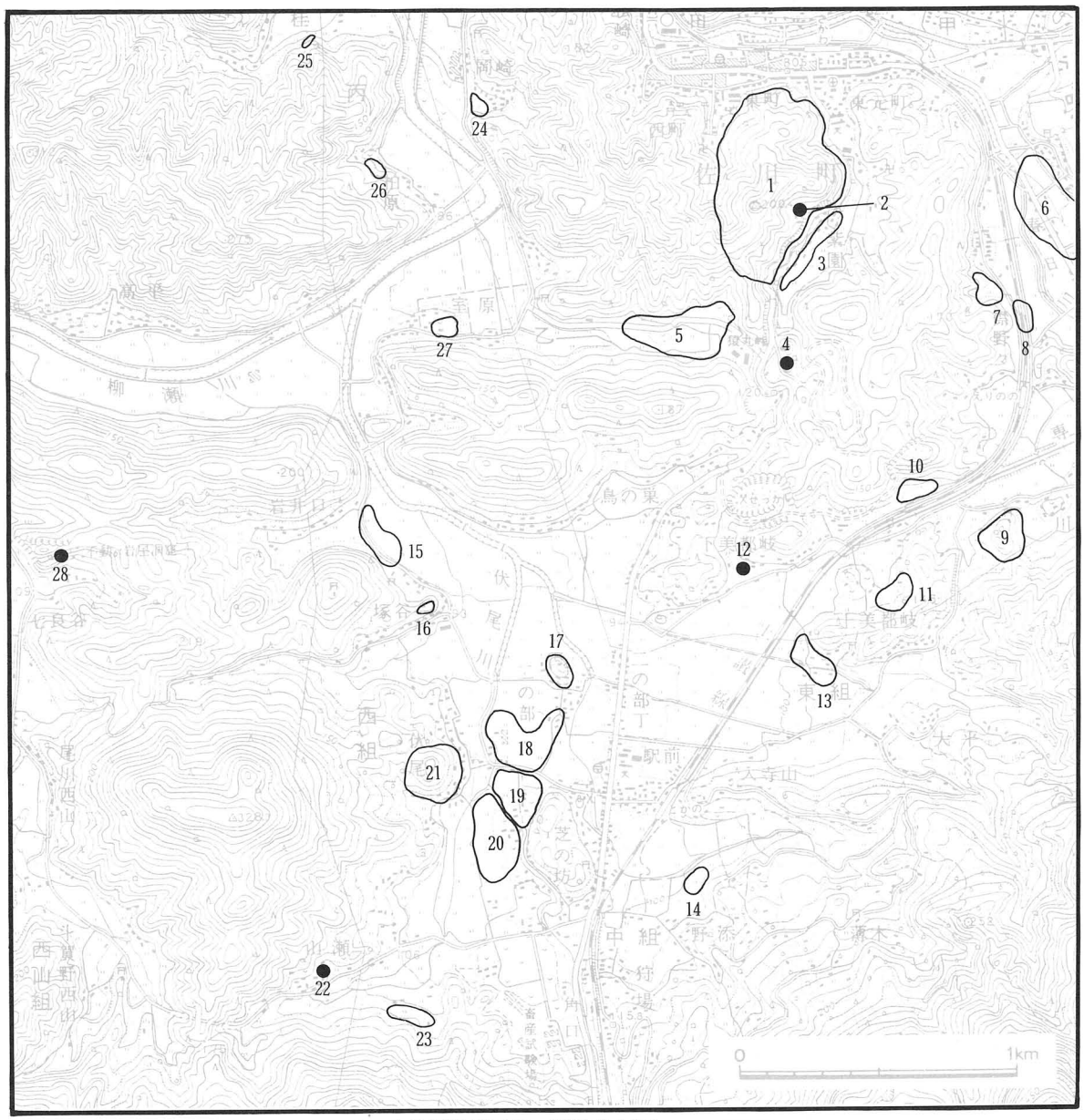


Fig. 3　斗賀野地区周辺の遺跡分布図（S＝1：25,000）

Tab.1　斗賀野地区周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	佐川城跡	中・近世	11	又屋敷遺跡	弥生	21	伏尾城跡	中世
2	深尾家の供養塔	近世	12	一ツ渕遺跡	〃	22	椎木谷遺跡	弥生
3	佐川土居跡	〃	13	上美都岐遺跡	古代・中世	23	山瀬遺跡	古代
4	猿丸太夫伝説の墓	奈良（中世）	14	野添遺跡	中世	24	岡崎遺跡	弥生
5	サギノス遺跡	中・近世	**15**	**岩井口遺跡**	**弥生・中世**	25	桂遺跡	縄文
6	永野遺跡	弥生	16	塚谷遺跡	弥生	26	柏原遺跡	〃
7	花ノ木窯跡	古代	17	二ノ部城跡	中世	27	室原遺跡	〃
8	襟野々窯跡	〃	18	二ノ部遺跡	弥生・中世	28	不動ガ岩屋洞穴遺跡	〃
9	甑巌遺跡	中世	19	二ノ部南遺跡	中世			
10	芝ノ端窯跡	古代	20	芝の坊遺跡	古代			

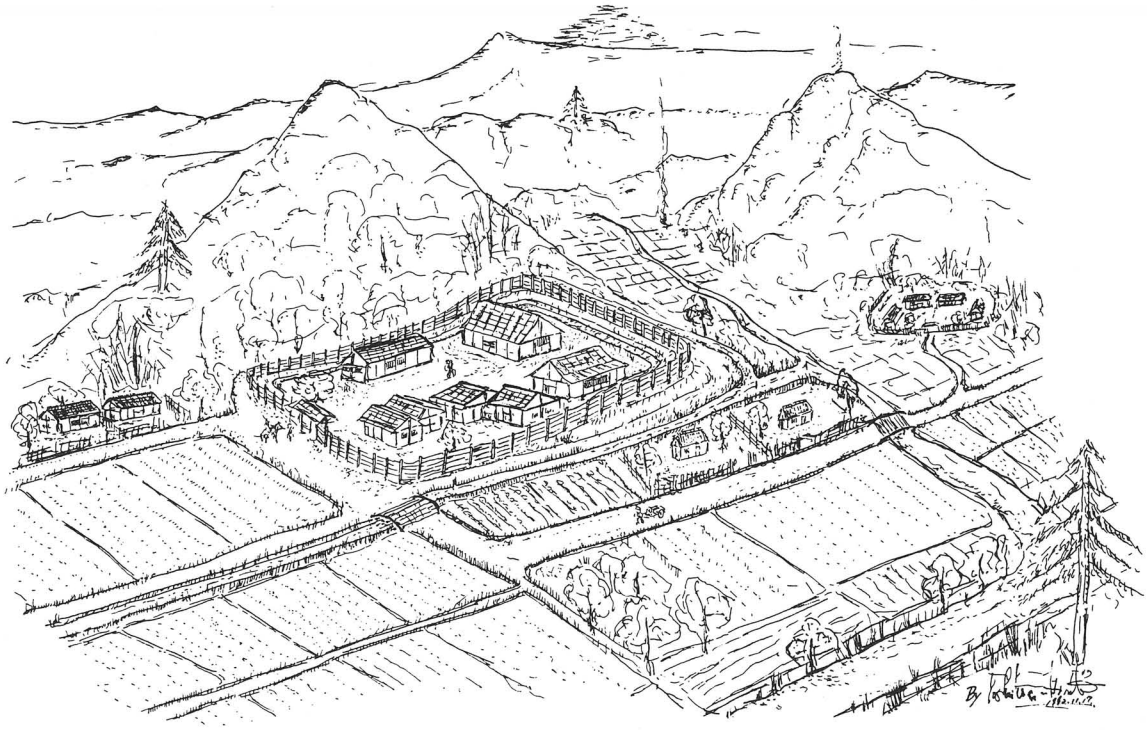
Tab. 2　岩井口遺跡 掘立柱建物跡計測表（第1次調査）

遺構番号	規模					面積（㎡）	棟方向（Nは真北）	備考
	梁×桁（間）（間）	梁間m	×	桁行m	柱間寸法 梁m	柱間寸法 桁m		
SB－101	2×3	4.65	×	6.75	2.10，2.55	2.10，2.55	31.4	N－53°－W	
SB－102	2×4	3.90	×	6.75	1.95	1.75～2.30	26.3	N－53°－W	東庇
SB－103	2×3	4.00	×	6.00	1.60，2.40	1.60～2.40	24.0	N－53°－W	
SB－104	2×2	3.30	×	3.70	1.50，1.80	1.60，2.10	12.2	N－37°－E	
SB－105	3×3	5.60	×	5.90	2.15	1.60～2.20	37.2	N－56°－W	南庇
SB－106	2×4	3.90	×	6.70	1.60，1.70	1.50～2.60	26.1	N－52°－W	東庇
SB－107	2×3	3.90	×	6.60	1.60～2.30	2.20	25.7	N－53°－W	
SB－108	2×3	3.50	×	6.10	1.60，1.90	1.80～2.40	21.4	N－52.5°－W	
SB－109	2×2	4.00	×	4.60	1.90，2.10	2.10，2.50	18.4	N－53°－W	
SB－110	2×2	2.30	×	2.90	1.10，1.20	1.40，1.50	6.7	N－38°－E	
SB－111	2×3	3.80	×	5.90	1.50～2.30	1.80，2.30	22.4	N－52°－W	
SB－112	2×2	3.40	×	5.00	1.60，1.80	2.40，2.60	22.5	N－58°－W	張出
SB－113	2×4	3.60	×	6.30	1.80	1.50，1.65	32.8	N－50°－W	〃
SB－114	2×3	3.30～3.50	×	4.80～5.10	1.65，1.85	1.35～2.25	16.7	N－51～58°－W	
SB－115	2×2	3.30～3.60	×	4.70～4.90	1.50，1.80	1.90～3.00	16.7	N－58～59°－W	
SB－116	2×3	3.60～3.80	×	5.80～5.85	1.80，2.00	1.65～2.50	22.0	N－34°－E	
SB－117	2×3	3.00	×	4.50	1.50	1.20，2.10	13.5	N－58°－W	
SB－118	2×3	4.30	×	6.10～6.20	2.10，2.20	2.10～2.80	30.2	N－46°－W	東庇,張出
SB－119	1×2	1.65～1.80	×	3.40	1.65，1.80	1.00～2.40	5.9	N－43.5°－W	
SB－120	1×2	2.25	×	3.80～3.90	2.25	1.80～2.10	8.7	N－39°－E	
SB－121	2×2	—	×	4.70	—	2.30，2.40	—	N－40.5°－W	
SB－122	2×2	2.30～2.40	×	5.25	1.10～2.40	1.50～2.10	12.3	N－34°－E	
SB－123	2×1	2.10～2.25	×	2.75	1.00～2.25	2.75	6.1	N－53°－W	
SB－124	2×3	3.00	×	4.95	1.50	1.50，1.95	14.9	N－58°－E	
SB－125	2×3	2.15	×	2.60～3.00	1.00，1.15	1.00，2.60	6.0	N－56°－W	
SB－201	1×3	2.20～2.30	×	5.25～5.65	2.20，2.30	1.00～2.25	12.2	N－50°－W	
SB－202	2×2	2.40～2.60	×	4.15	1.25，1.35	2.00，2.15	10.4	N－56°－E	
SB－203	1×3	2.15	×	4.60～4.75	2.15	1.40～1.75	10.1	N－61°－E	
SB－204	1×3	2.85～3.00	×	4.55～4.70	2.85，3.00	1.15～2.10	13.5	N－70°－E	
SB－205	1×2	3.10	×	3.90～4.30	3.10	1.40～2.50	12.7	N－88°－E	
SB－206	2×2	3.25～3.35	×	4.00	1.55～1.80	2.00	13.2	N－43°－W	
SB－207	1×2	2.15～2.20	×	3.25～3.60	2.15，2.20	1.60～2.00	7.5	N－41°－E	
SB－301	1×4～5	2.20	×	7.40～7.45	2.20	1.50～1.90	16.3	N－48.5°－W	
SB－302	2×3	3.20～3.40	×	5.50	1.30，1.90	1.30～2.30	18.2	N－48°－W	
SB－303	2×2	2.40	×	3.30	1.20	1.50～1.80	7.9	N－43°－E	
SB－304	1×2	2.35	×	3.50	2.35	1.60～1.90	8.2	N－45°－E	
SB－305	2×2	4.10	×	4.15	1.90，2.20	2.00，2.15	17.0	N－47°－W	
SB－401	2×3	2.00	×	3.20	1.00	1.00，1.10	6.4	N－41°－E	

参考文献

『佐川町史』上巻　佐川町　1982年

『高知県地名大辞典』　角川書店　1986年



岩井口遺跡復元想像図（平成4年度の現地説明会に使用した挿絵）

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法

今回の調査対象地区が平成4年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査（第1次調査）の対象地の南に隣接しいていることから，遺跡の南側に位置していることが判明していたため当初から全面発掘調査することとした。また，調査対象地は拡幅される道路幅で第1次調査の結果から遺構が残存すると考えられた部分（第1次調査のA区の南部分）が対象地となった。なお，第1次調査の際D･E区とした遺跡の北側に隣接する部分は，瓦用の粘土の採取が行われすでに破棄されていることが第1次調査によって判明していたため，今回の発掘対象地からは除外した。

調査は第1次調査の際設置した基準点を基にグリットを組み，標高もその際設置した水準点の成果を使用した。なお，その測量成果はTab.2に記している。

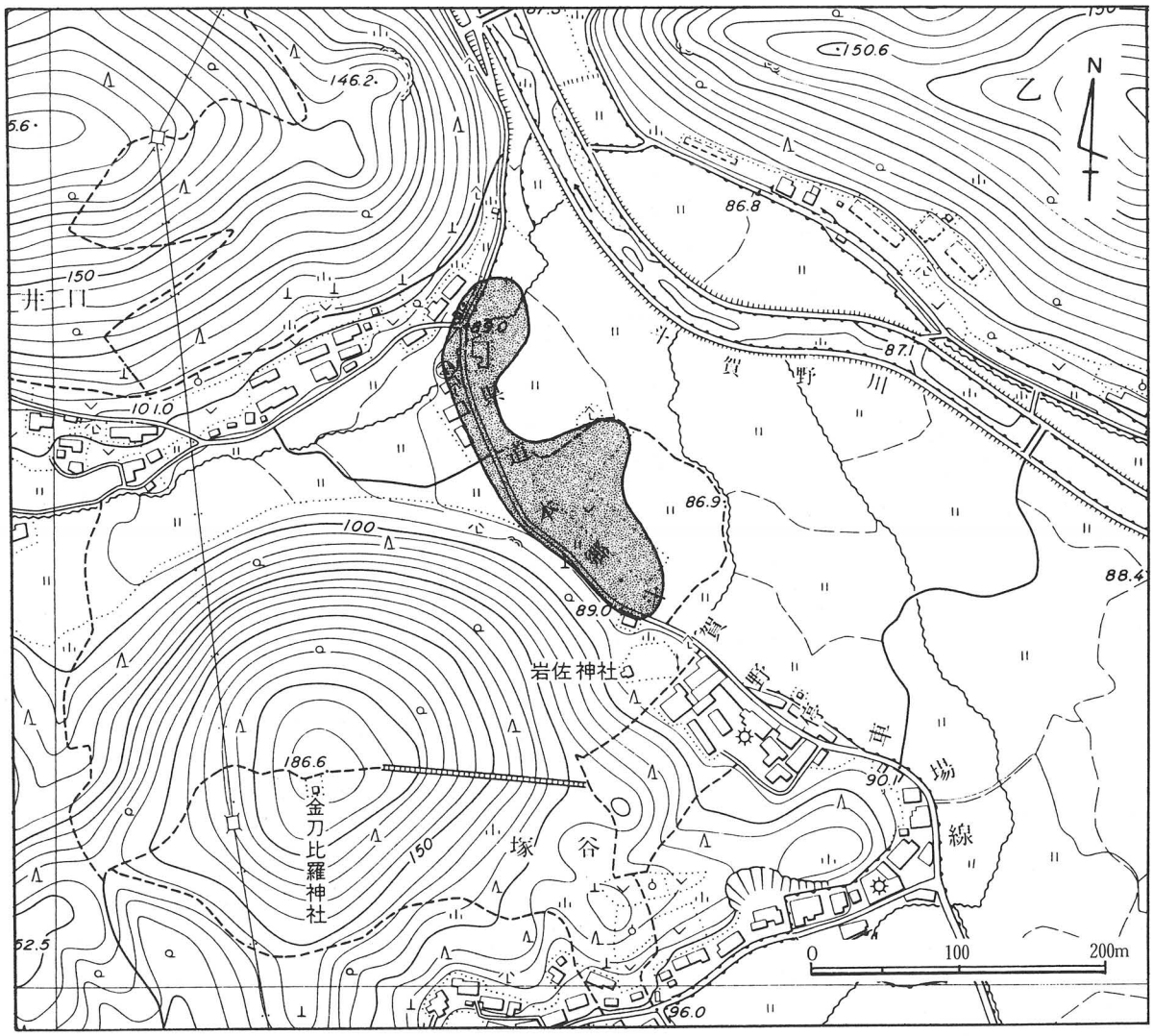


Fig. 4 岩井口遺跡範囲図

また，調査では第1次調査の際調査した道路予定地の下を通る水路部分を挟んで，南側，丁度館跡の内側に当たる部分をA区，館の外側に当たる北側をB区と呼称した。発掘対象面積は約2,000㎡で，発掘調査面積はA区が811㎡，B区が454㎡で，最終的な発掘調査面積は1,265㎡であった。

2. 調査区の概要

調査は，A区とB区に分けて行い，遺構が検出された部分の層序は，削平の状況によって残存状況に違いは見られたもののほぼ同じであったが，南北に長い調査区のため幾分異なるところもあるため地区ごとに以下土層の状況並びに遺物包含層出土遺物について記す。

(1) A区

A区は南北約72m，東西約12mと細長い調査区で，北側では黄褐色火山灰層の堆積が顕著で，南に行くに従って火山灰の堆積が薄くなり，それに連れて遺構の数も少なくなっている。

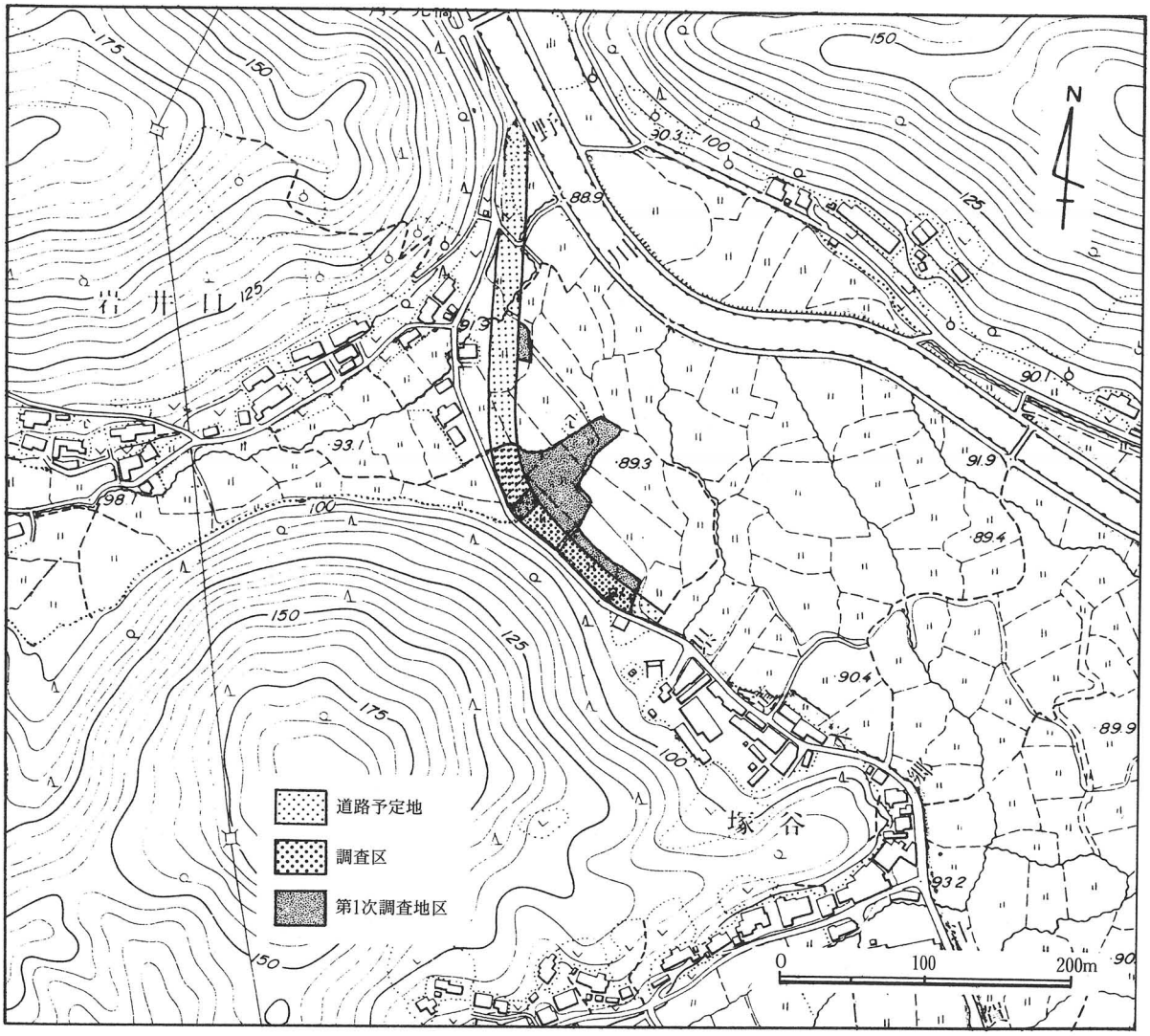


Fig. 5 調査地区周辺地形図

層序

A区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　黒褐色粘質土層

第Ⅲ層　黒色粘質土層

第Ⅳ層　黄褐色火山灰層

第Ⅴ層　褐色粘質土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅲ層，第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面であった。ただ，遺構埋土が黒色を基調としており，ほぼ同系色を呈す第Ⅲ層上面での検出が難しいため第Ⅳ層ないし第Ⅴ層上面まで掘り下げた部分もある。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土であり，厚さ20～30cmを測る。現況は水田である。

第Ⅱ層は遺物包含層である。全般に包含する遺物量は少ない。今回検出した中世の館跡に伴う時期のものとみて良さそうである。

第Ⅲ層は第Ⅳ層の火山灰が風化，腐食し土壌化した土層（黒ボク層）で南部を中心に認められた。また，この付近は鳥の巣石灰岩脈に当たり，何ヶ所かで土地の陥没跡がみられ，その陥没坑に堆積したものが部分的に認められた。

第Ⅳ層は約6,300年前に降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の堆積層であり，山際以外の部分で確認され，10～50cmの厚さの堆積が認められた。遺構の大半はこの上面で検出された。

第Ⅴ層は自然堆積層で，調査区南端及び山際での遺構検出面となっている。なお，この下層は灰褐色砂礫土層となっていた。

Tab.3　トラバース測量座標成果一覧表

（路線名　岩井口遺跡
測角点　TP－1～10　実測精度　1/63,068）

測角点	方向角	正整方向角	水平距離（m）	X（m）	Y（m）	座標点	標高（m）
TP－10	TP－1	171° 10′ 30"		500.000	500.000	TP－1	91.601
TP－1	TP－2	158° 35′ 17"	74.881	430.287	527.337	TP－2	91.968
TP－2	TP－3	128° 55′ 13"	118.297	355.963	619.378	TP－3	91.057
TP－3	TP－4	316° 59′ 14"	68.430	405.999	572.689	TP－4	90.898
TP－4	TP－5	317° 12′ 36"	40.451	435.684	545.219	TP－5	91.073
TP－5	TP－6	326° 25′ 21"	39.902	470.037	524.921	TP－6	91.114
TP－6	TP－7	62° 33′ 47"	46.313	491.377	566.025	TP－7	90.336
TP－7	TP－8	331° 15′ 55"	56.332	540.772	538.943	TP－8	90.745
TP－8	TP－9	339° 24′ 31"	24.365	563.580	530.374	TP－9	90.245
TP－9	TP－10	278° 45′ 19"	41.717	569.930	489.143	TP－10	91.928
TP－10	TP－1	171° 10′ 30"	70.268	500.000	500.000	TP－1	91.601
TP－1	鉄塔A	315° 53′ 54"	297.091	713.343	293.245	鉄塔A	
TP－2	鉄塔A	320° 24′ 31"	367.314	〃	〃	鉄塔A	

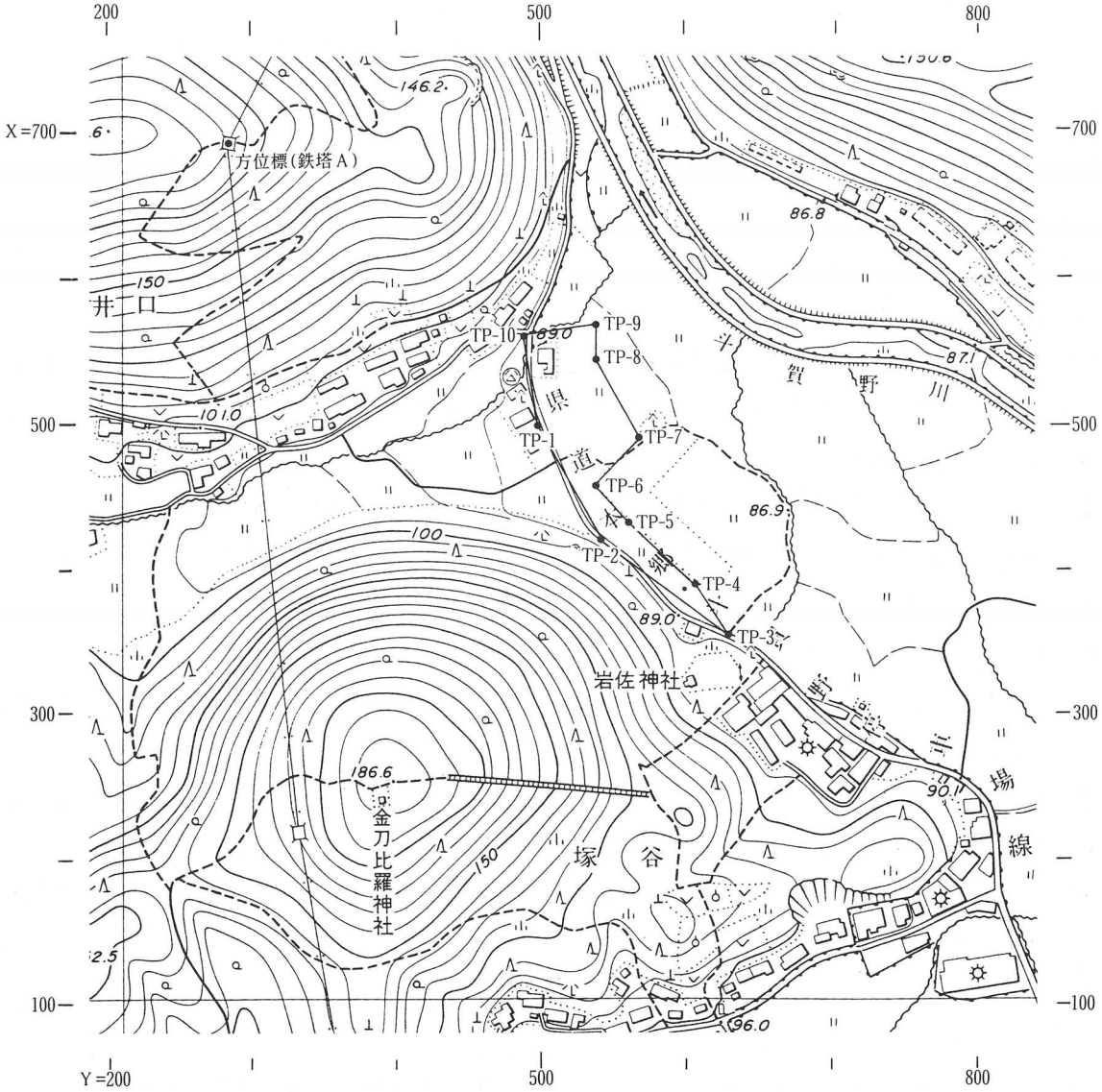


Fig. 6　岩井口遺跡トラバースポイント配置図(S=1:5,000)

第Ⅱ層出土遺物

土師質土器（Fig.9−1〜3）

1と2は杯である。1の口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がり，端部を細く仕上げるのに対し，2の口縁部は斜め上方に上がるものとみられる。底部外面は双方とも回転糸切り底となっている。3は小皿で，口径6.8cm，器高1.5cm，底径4.4cmを測り，口縁部は斜め上方に短く上がる。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が残る。

備前（Fig.9−4）

壷の底部とみられる。胴部は平らな底部から外上方に上がっている。底部外面にはナデ調整，胴部内外面には回転ナデ調整を施す。

青磁（Fig.9−5）

碗の底部で，口縁部を欠く。高台は削り出し高台である。体部外面には鎬蓮弁文，見込には唐草

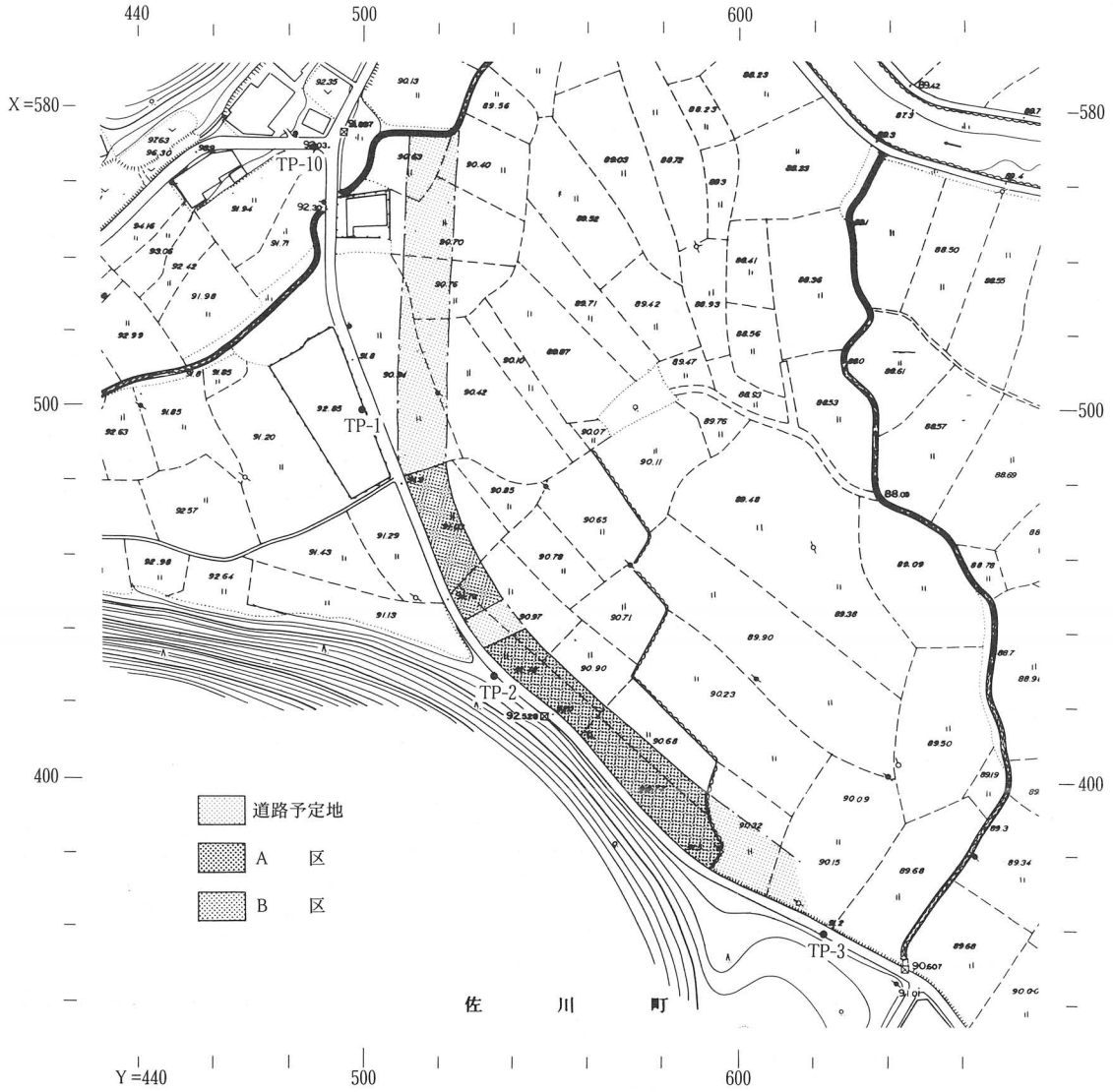


Fig. 7 岩井口遺跡調査区全体図

文が施され，緑色釉が畳付から内面にかけて施釉され，見込は釉剝ぎが行われる。

(2) B区

B区は，南北約42m，東西約10mの調査区で，調査区中央部を頂点として両側に向って傾斜している。また，南半分では火山灰層の堆積が認められたが，北側ではほとんど堆積していなかった。B区で認められた基本層序並びに出土遺物が以下のとおりである。

層序

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　旧表土層

第Ⅲ層　赤褐色粘質土層

第Ⅳ層　黒褐色粘質土層

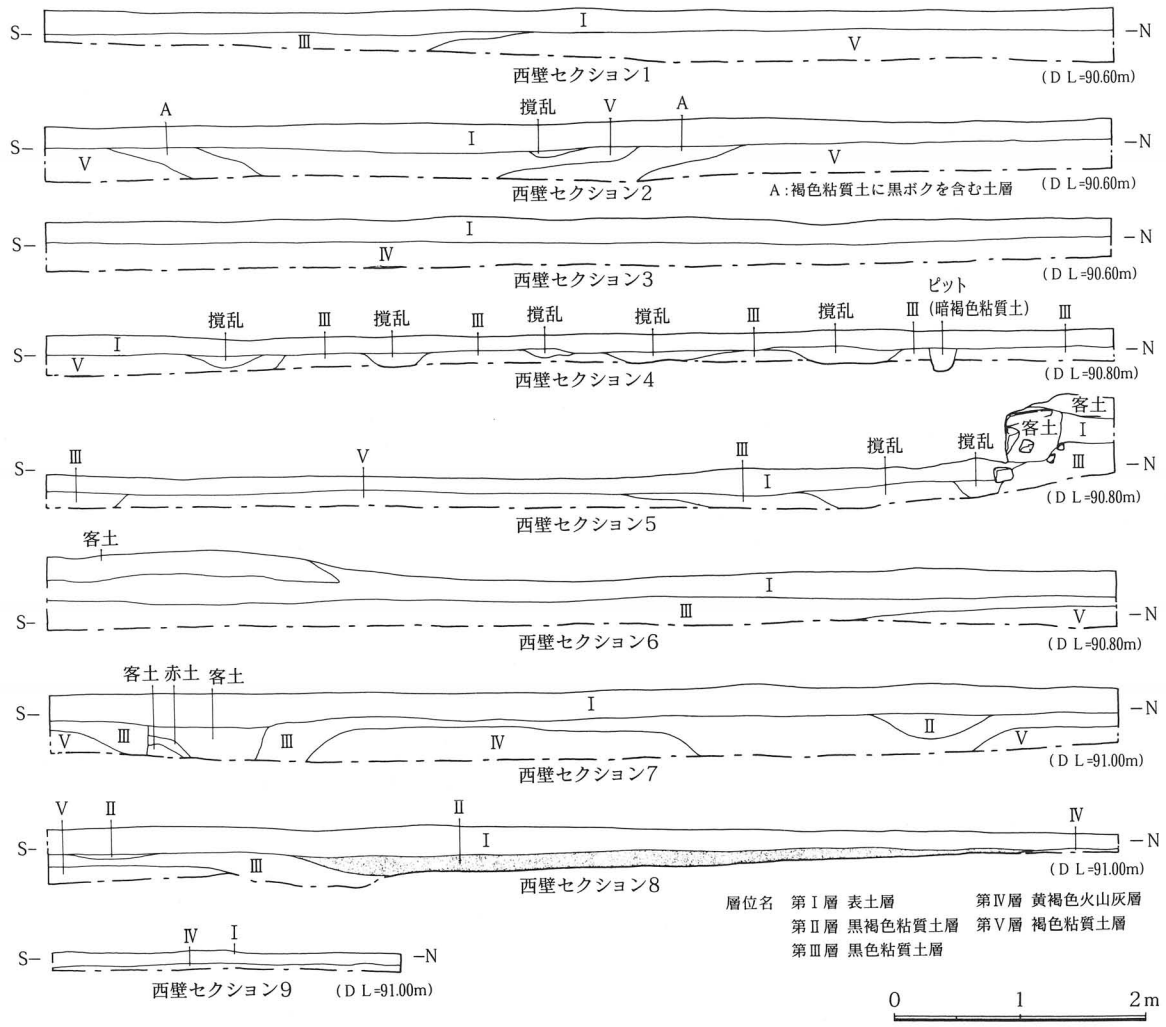


Fig. 8　A区西壁セクション図

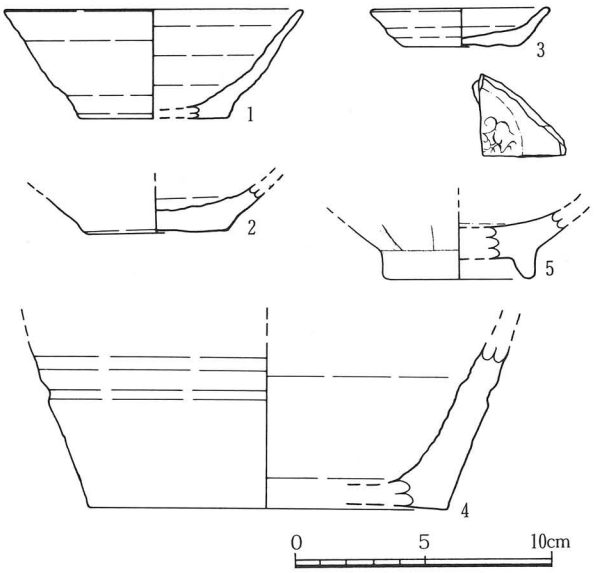


Fig. 9　A区第Ⅱ層出土遺物実測図

第Ⅴ層　黄褐色火山灰層

第Ⅵ層　砂礫混暗褐色粘質土層

第Ⅶ層　淡黄色粘土層

層位中，遺構が検出されたのは第Ⅳ～Ⅵ層上面であり，第Ⅳ・Ⅴ層上面で検出された遺構が多い。

第Ⅰ層の表土層は，現在の耕作土で厚さ約20cmを測る。現況はすべて水田であった。

第Ⅱ層は旧表土層で調査区南端部で認められた。

第Ⅲ層は第Ⅰ層に伴う床土で，鉄分が沈澱し赤褐色を呈する。

第Ⅳ層は中世の遺物包含層であり，調査区

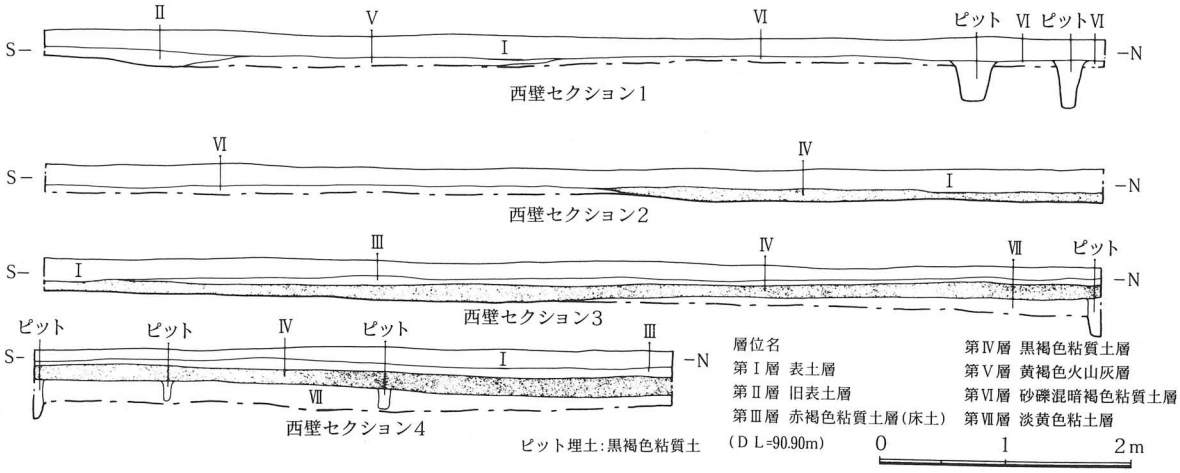


Fig. 10 B区西壁セクション図

中央部から北側で認められた。遺物の包含量は少ない。A区の第Ⅱ層に対応する。

第Ⅴ層は約6,300年前に降下した火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の堆積層であり，調査区中央部から南において認められた。A区ではこの層の上には黒ボク層の堆積が認められたが，B区では確認されなかった。A区の第Ⅵ層に対応する。

第Ⅵ層は自然堆積層で，調査区中央部において認められた土層で，その部分の遺構検出面となっている。

第Ⅶ層も自然堆積層で，調査区北側，第Ⅳ層の下層において認められた土層である。

第Ⅳ層出土遺物

土師質土器（Fig.11−1・2）

1は杯で，口径12.0cm，器高4.5cm，底径6.6cmを測る。口縁部は体部から外上方にほぼ真直ぐ上がり，端部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，口縁部内外面には回転ナデ調整が施される。2は小皿で，口径6.0cm，器高1.7cm，底径4.0cmを測る。口縁部は短く斜め上方に上がり，端部を丸く仕上げる。

青磁（Fig.11−3〜5）

3点とも碗である。3は口縁部外面には鎬蓮弁文が施され，器面には灰緑色釉が施釉される。4は口縁部が上外方を向くもので，端部外面に1条の界線がみられ，器面には緑色釉が施釉される。5は底部の破片で，見込に鎬による草花文が見られる。高台は低く，削り出し高台となっている。畳付外端から内面にかけて緑色釉を施釉するが，器面はハダ荒れがみられ，灰黄色を呈する部分が多い。

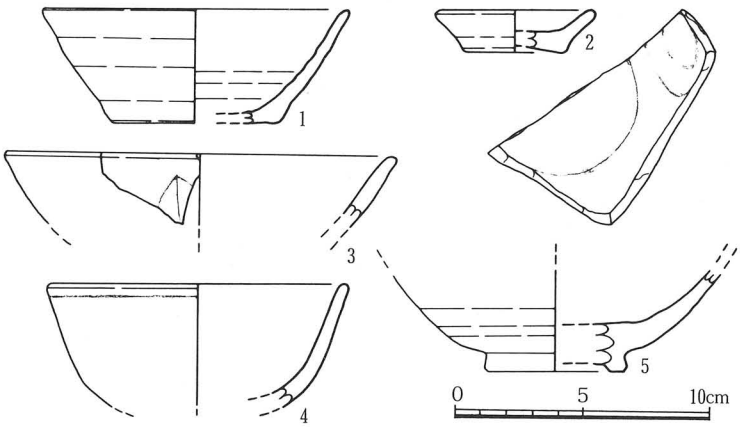


Fig. 11 B区第Ⅳ層出土遺物実測図

Tab.4 岩井口遺跡 塀跡計測表（第1次調査）

遺構番号	規模			方向（Nは真北）	備考
	柱穴数	全長 m	柱間距離 m		
SA－101	14	25.00	1.50～2.10		コの字形
SA－102	8	14.80	1.75～2.70	N－42° －E	
SA－103	4	6.00	1.90～2.10	N－40° －E	
SA－104	6	10.40	1.80～2.70		L字形
SA－105	5	7.80	1.80，2.10	N－35° －E	
SA－106	3	3.30	1.50，1.80	N－54° －W	
SA－107	7	11.70	1.40～2.30		L字形
SA－108	7	5.70	0.70～1.10	N－42.5° －W	
SA－109	3	3.00	1.40，1.60	N－48° －E	
SA－110	5	6.35	1.50～1.65	N－64° －E	
SA－111	5	8.05	1.30～2.90	N－61° －W	
SA－201	7	10.40	1.30～2.10		L字形
SA－202	4	3.90	1.15～1.50	N－58° －E	
SA－203	3	2.45	1.20，1.25	N－37° －W	
SA－204	3	3.45	1.65，1.80	N－40° －W	
SA－301	7	10.25	1.20～2.10		L字形
SA－302	4	5.10	1.65～1.80	N－43° －E	
SA－303	3	2.70	1.35	N－48° －E	
SA－501	4	4.85	1.35～1.95	N－48° －W	
SA－502	6	5.80	1.00～1.30		L字形

第Ⅳ章　遺構と遺物

本項では，調査区ごとに掘立柱建物跡（SB），塀跡又は柵列（SA），土坑（SK），溝跡（SD），ピット（P），畝状遺構（SF）の順に主だった遺構について記す。なお，遺構番号は各地区通し番号とし，時代では区分していない。また，遺構の大半は館跡の伴うものであるが，B区で近世の遺構も散見される。

1. A区

第1次調査のA区とC区の南側に当たる部分で，館跡の中心部が含まれる。掘立柱建物跡19棟，塀跡4列，土坑6基，溝跡4条などが検出された。

(1) 掘立柱建物跡

SB－101

調査区北端部で検出した梁間1間（2.10m），桁行3間（5.60m）の東西棟建物跡である。SB－102の南隣に位置し，SB－102の南側柱の柱穴が重複する。棟方向はN－56°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が2.10m，桁行（東西）が1.80mと2.00mである。柱穴は比較的大きく径約50cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器などがみられ，内3点が復元できた。

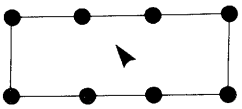


Fig. 12　ＳＢ－101

出土遺物

土師質土器（Fig.31－6）

6は杯で，体部は内湾気味に上がる。底部は径5.8cmで，外面は回転糸切り底となっている。

土製品（Fig.31－7）

紡錘形の土錘で，長さ4.5cm，幅1.3cm，重さ5.7gで，孔径0.4cmを測る。

青磁（Fig.31－8）

碗で，底部を欠く。口縁部外面には鎬蓮弁文がみられる。器面には灰緑色釉を施釉するが，外面を中心に風化がみられる。

SB－102

調査区北端部で検出した梁間2間（3.90m），桁行4間（7.60m）の東西棟建物跡で，東から1間目と2間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。SB－101の北隣に位置し，SB－101の北側柱の柱穴と重複する。棟方向はN－55°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.80mと2.10m，桁行（東西）が1.80m，1.90m，2.10mと区々である。柱穴は径40～50cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片が約20点あったが，復元できた遺物はない。

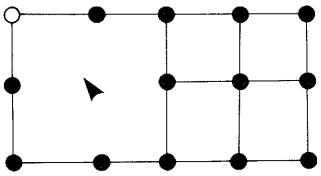


Fig. 13　ＳＢ－102

SB－103

調査区北端部で検出した梁間2間（3.60m），桁行3間（5.40m）の東西棟建物跡で，南北妻柱の柱穴2個が未検出である。SB－102・104・105と重なる。棟方向はN－45°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.80m等間隔，桁行（東西）も1.80m等間隔である。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器の細片が20点ほどみられたが，復元できたのは1点のみであった。

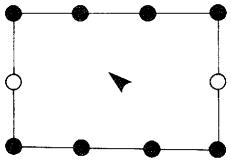


Fig. 14　ＳＢ－103

出土遺物

土師質土器（Fig.31－9）

杯で，体部は斜め上方を向く。底径は5.4cmで，外面は回転糸切り底となっている。内面には回転ナデ調整，外面は未調整となっている。

SB－104

調査区北端部で検出した梁間2間（3.60m），桁行3間（5.30m）の東西棟建物跡である。SB－101～103・105と重なる。棟方向はN－55°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.80m等間隔，桁行（東西）が1.50～2.00mと区々である。柱穴は径約35cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器の細片が20点ほどみられたが，復元できたものはなかった。

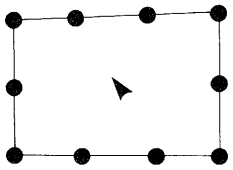


Fig. 15　ＳＢ－104

SB－105

調査区北端部で検出した梁間2間（4.20m），桁行2間（4.60m）の東西棟総柱建物跡である。SB－102～104と重なり，SB－104の東妻柱の2個の柱穴と重複する。棟方向はN－56°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が2.00mと2.20mで，桁行（東西）が2.20m，2.30m，2.50mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器の細片10点と瀬戸・美濃系とみられる陶器の細片1点があったが，復元できたものはなかった。

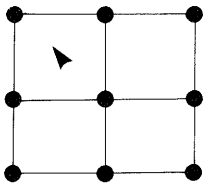


Fig. 16　ＳＢ－105

SB－106

調査区北端部で検出した梁間2間（3.30m），桁行2間（3.40m）の東西棟建物跡で，北東隅の柱穴1個が未検出である。SB－102の北側に位置する。棟方向はN－56°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.50mと1.80m，桁行（東西）が1.50mと1.90mである。柱穴は径25～30cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片が6点あり，内1点が復元できた。

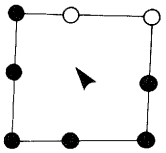


Fig. 17　ＳＢ－106

出土遺物

土師質土器（Fig.31－10）

杯で，口縁部を欠く。体部はやや内湾気味に上がる。底径は5.3cmで，外面は回転糸切り底とな

っている。器面は摩耗しており調整は不明である。

SB－107

調査区北部で検出した梁間1間（1.80m），桁行2間（3.10m）の東西棟建物跡である。SB－108と隣接する。棟方向はN－56°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.80m，桁行（東西）が1.20～1.90mと区々である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片などが20点ほどみられたが，内1点が復元できた。

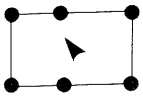


Fig. 18 ＳＢ－107

出土遺物

土製品（Fig.31－11）

紡錘形の土錘で，長さ4.8m，幅1.3cm，重さ5.4gで，孔径は0.4cmを測る。

SB－108

調査区北部で検出した梁間1間（1.80m），桁行1間（2.10m）の南北棟建物跡である。SB－107の南側に隣接する。棟方向はN－32°－Eである。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片が5点あり，内1点が復元できた。

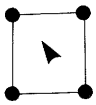


Fig. 19 ＳＢ－108

出土遺物

瀬戸系（Fig.31－12）

四耳壷で，肩部から胴部にかけて残存する。肩の張った肩部には4条の凹線の入った2個の把手が残存し，体部最大径は上胴部にある。胴部下半にはヘラ削り，内面は回転ナデ調整の後，下胴部にヘラ削りが施される。胎土は精良で灰白色を呈し，外面には淡緑色釉を施釉する。

SB－109

調査区中央部北よりで検出した梁間1間（3.00m），桁行2間（4.50m）の東西棟建物跡である。SB－110の北隣に位置する。棟方向はN－55°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が3.00m，桁行（東西）が2.20mと2.30mである。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片が10点ほどみられたが，復元できた遺物はなかった。

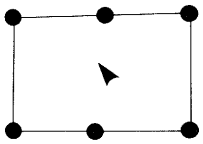


Fig. 20 ＳＢ－109

SB－110

調査区中央部北よりで検出した梁間2間（2.80m），桁行2間（3.00m）の東西棟総柱建物跡で，南東隅の柱穴が未検出である。SB－109の南隣りに位置し，北側にはSA－101が取り付くものとみられる。棟方向はN－48°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.20mと1.60m，桁行（東西）が1.50m等間隔である。柱穴は径25～30cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物は皆無であった。

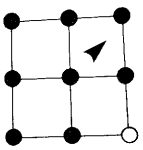


Fig. 21 ＳＢ－110

SB－111

調査区中央部北よりで検出した梁間2間（3.30m），桁行2間（3.80～3.90m）とやや歪みのある南北棟建物跡である。SB－113の北隣りに位置する。棟方向はN－42°－Eである。柱間寸法は梁（東西）が1.40mと1.65m，桁行（南北）が1.80m，1.90m，2.00mと区々である。柱穴は径30cm前後の円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物は皆無であった。

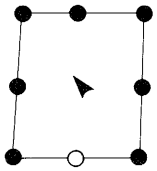


Fig. 22　ＳＢ－111

SB－112

調査区中央部で検出した梁間1間（1.80～2.00m），桁行2間（2.00～2.20m）と歪みのある東西棟建物跡で南側柱の柱穴1個が未検出である。SB－114の西隣りに位置する。棟方向はN－88°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.80mと2.00m，桁行（東西）が1.10mと2.00mである。柱穴は径25～30cmの円形で，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片が1点あったが，復元できなかった。

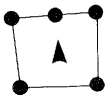


Fig. 23　ＳＢ－112

SB－113

調査区中央部で検出した梁間2間（3.30m），桁行4間（7.40～7.50m）と歪みのある東西棟建物跡で，北側柱が3間と変則になっている。また，東妻柱の柱穴1個が未検出である。SB－114の北隣りに位置する。棟方向はN－49°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.65m等間隔，桁行（東西）が1.50～2.30mである。柱穴は径35～45cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片が20点ほどみられたが，復元できるものはなかった。

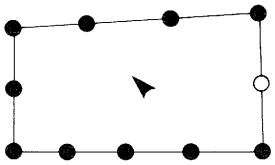


Fig. 24　ＳＢ－113

SB－114

調査区中央部で検出した梁間2間（3.60m），桁行4間（7.50m）の東西棟建物跡で東側柱の柱穴1個が未検出である。SB－113の南隣りに位置する。棟方向はN－47°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.80m等間隔，桁行（東西）が1.80m，1.90m，2.00mと区々である。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片などがみられたが，復元できたのは西側柱真中の柱穴より出土した染付1点であった。

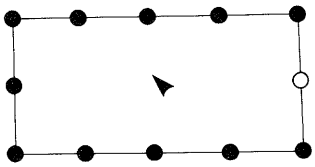


Fig. 25　ＳＢ－114

出土遺物

染付（Fig.31－13）

碗で口縁部の破片である。口縁部外面には2条の界線と文様，内面には1条の界線が施され，器面には乳白色釉が施釉される。

SB－115

調査区南部で検出した梁間1間（3.00m），桁行3間（7.50m）の身舎に西庇付きの東西2間（5.10m），南北3間（7.50m）の南北棟建物跡である。SB－118の北隣りに位置する。棟方向はN－37°－Wである。柱間寸法は梁（東西）が3.00m，桁行（南北）が2.00m，2.70m，2.80mと区々で，庇幅は2.10mである。柱穴は径40～60cmの円形で，柱径は20cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片約10点があり，内3点が復元できた。

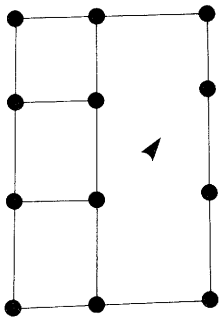


Fig. 26 ＳＢ－115

出土遺物

土師質土器（Fig.31－14～16）

14・15は杯で，14は口径11.0cm，器高3.5cm，底径5.6cmで，口縁部は斜め上方に上がり，端部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，口縁部から内面にかけて丁寧な回転ナデ調整を施す。15は口縁部を欠く。体部はやや内湾気味に上がる。底径は7.6cmで，外面は回転糸切り底となる。内外面には回転ナデ調整，内底面にはナデ調整を加える。16は小皿で，口径6.8cm，器高2.8cm，底径4.4cmを測る。口縁部は小さく外反し，端部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底となっている。

SB－116

調査区南部で検出した梁間2間（3.30m），桁行2間（4.20m）の東西棟建物跡である。SB－115と重なっている。棟方向はN－46°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.50～1.80mと区々で，桁行（東西）も1.90～2.30mと区々である。柱穴は径35～45cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片4点，常滑の甕片3点，青磁片1点がみられたが，復元できたものはなかった。

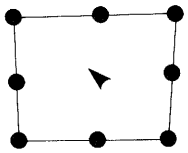


Fig. 27 ＳＢ－116

SB－117

調査区南部で検出した梁間2間（3.40～3.60m），桁行3間（6.30m）とやや歪みのある南北棟建物跡である。SB－116の東側に隣接する。棟方向はN－43°－Eである。柱間寸法は梁（東西）が1.60～2.00mと区々で，桁行（南北）が1.10～3.00mと区々である。柱穴は径35～45cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片3点などがあり，復元できたのは北西隅の柱穴から出土した東播系須恵器1点であった。

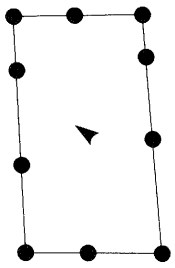


Fig. 28 ＳＢ－117

出土遺物

東播系須恵器（Fig.31－17）

こね鉢の口縁部である。口縁部は斜め上方に上がり，端部を上下に若干肥厚する。外面には回転ナデ調整，口縁端部から内面にかけてハダ荒れがみられる。

SB－118

調査区南部で検出した梁間1間（2.10～2.25m），桁行3間（6.50m）とやや歪みのある細長い東西棟建物跡である。SB－115の南隣りに位置する。棟方向はN－45°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が2.10m，2.25mで，桁行（東西）は中1間が2.80m，両側が1.80mと1.90mになっている。柱穴は径30～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが，復元できたものはなかった。

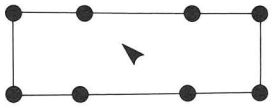


Fig. 29　ＳＢ－118

SB－119

調査区南部で検出した梁間2間（3.10m），桁行5間（9.60m）と細長い東西棟建物跡である。SB－118の東隣りに位置する。棟方向はN－54°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が1.35m～1.60m，桁行（東西）が1.80m，1.90m，2.00mとなっている。柱穴は径35～40cmの円形で，柱径は15cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。遺物は全く出土していない。

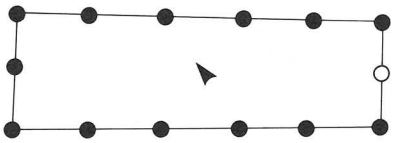


Fig. 30　ＳＢ－119

（2）塀跡及び柵列

SA－101

調査区中央部北よりで検出したL字形をなす塀である。SB－110の北隣りで，北側柱から1.0m，

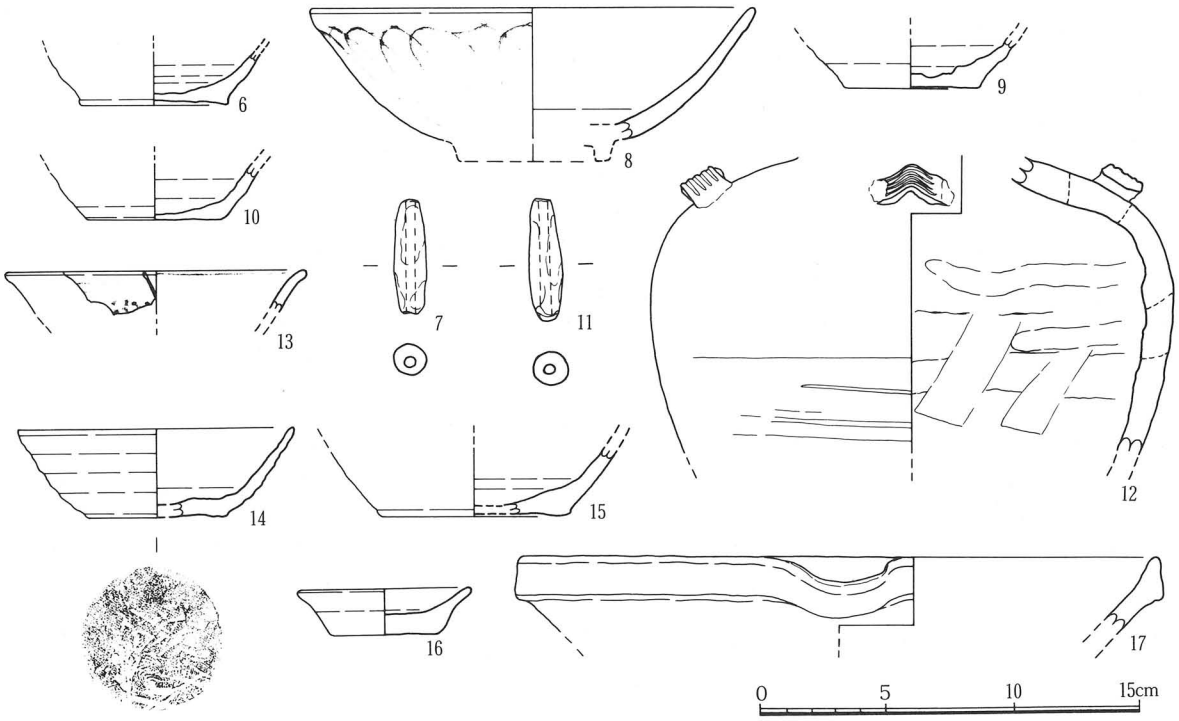


Fig. 31　掘立柱建物跡出土遺物実測図

東妻柱から30cmのところに位置する。3間分（4.45m）を検出し，柱間は1.15～1.70mである。柱穴は径25～30cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片2点が認められたが，復元できたものはなかった。

SA－102

調査区中央部で検出した南北塀（N－30°－E）である。SB－111の西隣りに位置する。4間分（5.60m）を検出し，柱間は1.30～1.50mである。柱穴は径25～30cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒はほとんど含まなかった。出土遺物には土師質土器片3点が認められたが，復元できたものはなかった。

SA－103

調査区中央部で検出した南北塀（N－37°－W）である。SB－111の南隣りに位置する。3間分（4.00m）を検出し，柱間は中1間分が1.60mで，両1間分が1.20mである。柱穴は径約25cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土が主で，黄褐色火山灰土粒はほとんど含まなかった。出土遺物は皆無であった。

SA－104

調査区南部で検出した南北塀（N－44°－W）である。SB－116の北隣りに位置する。3間分（5.00m）を検出し，柱間は1.30m，1.80m，1.90mである。柱穴は径約30cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器片約10点がみられたが，復元できたものはなかった。

（3）土坑

SK－101

調査区北部で検出した不整方形土坑で，SK－102に切られている。長辺0.85m，短辺0.70m，深さ35cmで，北西側に3段の平場があり，南東側が楕円形の落ち込みとなっている。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを比較的多く含むものであった。遺物は土師質土器の2点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.36－18・19）

2点とも杯で，口縁部が欠損する。口縁部は外上方に上がり，底部外面は回転糸切り底で，内面には回転ナデ調整で，内底面にナデ調整を加える。外面は未調整である。19の底部外面には板状圧痕が残る。

SK－102

調査区北部で検出した方形土坑で，SK－101を切って掘り込まれている。長辺1.08m，短辺0.58m，深さ12cmで，底面は南に向ってやや傾斜している。長軸方向はN－34°－Wである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを比較的多く含むものであった。遺物は土師質土器片が3点あったのみで，復元できた遺物はなかった。

SK－103

調査区北部で検出した方形土坑で，SB－107と重なっている。長辺1.67m，短辺2.19m，深さ16cmで，底面は南に向ってやや傾斜している。主軸方向はN－33°－Eである。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを多く含むものであった。遺物には土師質土器片が比較的多くあったが，復元できたのは3点であった。

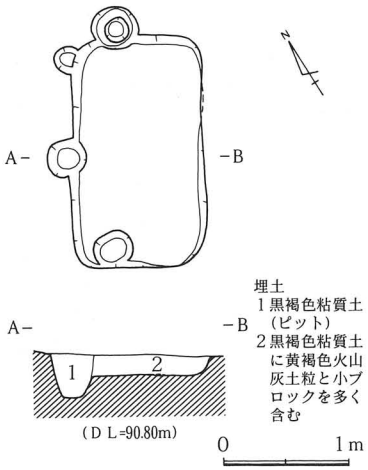


Fig. 32　SK－103

出土遺物

土師質土器（Fig.36－20・21）

20は杯で，口縁部が欠損する。体部は外上方に上がる。底部は径6.4cmで，外面は回転糸切り底になっている。器面には回転ナデ調整が施される。21は小皿で，口径6.8cm，器高1.2cm，底径3.0cmを測る。口縁部は短く斜め上方を向き，端部を丸く仕上げる。器面は摩耗しており調整不明である。

土製品（Fig.36－22）

紡錘形の土錘で，長さ5.5cm，幅1.4cm，重さ7.1gを測り，孔径は0.4cmである。

SK－104

調査区中央部北よりで検出した円形土坑で，約半部を検出した。径2.12m，深さ22cmで，底面は中央部がやや深くなっている。埋土は黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックはほとんど含まなかった。遺物は土師質土器の細片が約10点あったのみで，復元できた遺物はなかった。

SK－105

調査区中央部南よりで検出したほぼ円形の土坑で，SB－113の東側柱北から2個目の柱穴が掘り込まれていた。長径1.12～1.20m，深さ12cmで，底面は中央部がやや深い。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを多く含むものであった。遺物には土師質土器片4点に鉄滓1点があったが，復元できた遺物はなかった。

SK－106

調査区南部で検出した炭窯ではないかとみられる方形土坑で，SB－117の柱穴が掘り込まれていた。長辺4.15m以上，短辺1.90mで，残存していた深さは10cmであった。底面はほぼ平坦で長さ約1.5mの炭化した木が2本残存し，壁は南東部を中心に焼け赤黄色を呈し，炭化物の付着がみられた。長軸方向はN－12°－Eである。埋土は黒褐色粘質土で多量の

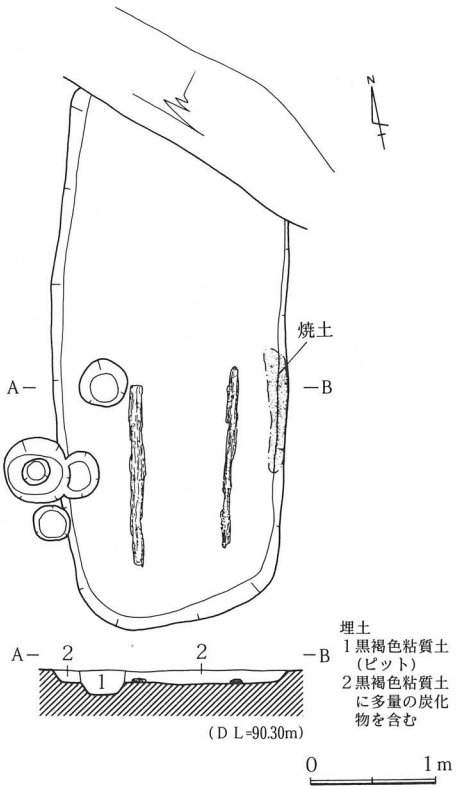


Fig. 33　SK－106

炭化物を含んでいた。遺物は皆無で，復元できた遺物はなかった。

(4) 溝跡

SD－101

調査区中央部で検出した南北溝で，第1次調査の際のSD－106に繋がり，館跡の東の境をなす可能性がある。幅65～80cm，深さ22～27cmで北に向って傾斜しており，約6.8mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒を僅かに含むものであった。遺物には土師質土器片が比較的多く見られたが，復元できたのは1点であった。

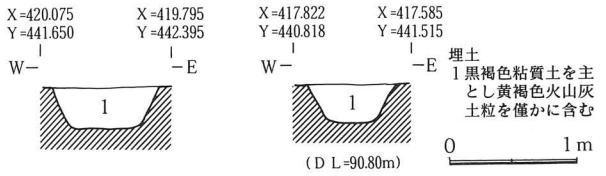


Fig. 34 ＳＤ－101

出土遺物

土師質土器（Fig.36－23）

杯で，口縁部が欠損する。体部はやや内湾して上がり，底部外面は回転糸切り底となっている。内面は回転ナデ調整，外面は未調整となっている。

SD－102

調査区中央部で検出したL字形の南北溝で，SB－111と重なっている。幅25～30cm，深さ5cm前後で，北に向ってやや傾斜しており，約13mを検出した。断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒を僅かに含むものであった。遺物には土師質土器の細片が数点みられたのみで，復元できたものはなかった。

SD－103

調査区北部で検出した短い東西溝で，SB－106と重なっている。幅約35cm，深さ約27cmで，約4.6mを検出した。断面は逆三角形状を呈する。埋土は2層に分層され，2層とも黒褐色粘質土を主とし，上層は黄褐色火山灰土粒を僅かに含むもので，下層は黄褐色火山灰土粒を多く含んでいた。遺物は土師質土器片が比較的多く出土しているが，復元できたのは2点であった。

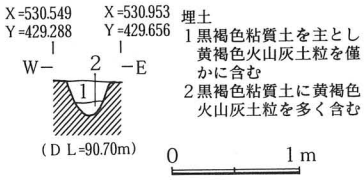


Fig. 35 ＳＤ－103

出土遺物

土師質土器（Fig.36－24・25）

2点とも杯で，24は口径12.2cm，器高4.3cm，底径5.9cmで，口縁部は体部から外上方にのび，端部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，口縁部内外面には回転ナデ調整が施される。25は口縁部を欠く。底部外面は回転糸切底で，他は摩耗しており調整不明である。

SD－104

調査区北部で検出した短い東西溝で，SB－106の南側柱の柱穴が掘り込まれていた。また，遺構はSK－101・102を切って掘り込まれていた。幅20cm，深さ5cmで，約3mを検出した。断面はU字

形を呈する。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒を僅かに含むものであった。出土遺物は皆無であった。

(5) ピット

多くが建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられ，柱根の一部が残存していた柱穴もあった。掘方は大半が円形で，径20～60cm，深さは20～50cmで，径30～40cm，深さ35cm前後のものが多い。埋土は黒褐色粘質土のものを中心に，黄褐色火山灰土粒が混入した柱穴も多くみられた。調査区北部に多く検出され，南部に行くに従って少なくなる。

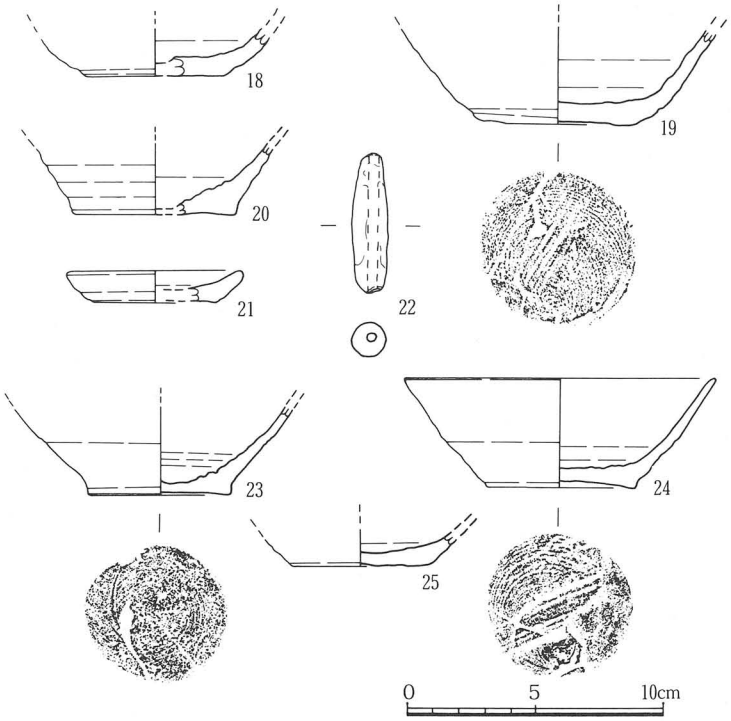


Fig. 36 土坑，溝跡出土遺物実測図

また，第1次調査の際A区で，多く検出された径70前後の円形のピットは散見される程度で数は少ない。

出土遺物

土師質土器（Fig.37－26～37）

26～34は杯で，26～31は器高が低い。26は口径11.8cm，器高3.1cm，底径4.8cm，27は口径11.7cm，器高3.3cm，底径5.6cm，28は口径12.1cm，器高2.7cm，底径6.2cm，29は口径12cm，器高3.0cm，底径5.0cmであり，30・31は口縁部を欠き，底径は5.0cm，4.8cmを測る。それぞれ口縁部は斜め上方に上がり，端部を細く仕上げている。底部外面は回転糸切り底で，外面から内面にかけて丁寧な回転ナデ調整が施される。32～35は口縁部を欠くが，比較的器高が高いものである。体部は外上方へ上がり，底部外面は回転糸切り底で，内面は回転ナデ調整を施し，外面は未調整である。35～37は小皿で，35は口径6.3cm，器高1.3cm，底径3.9cm，36は口径7.9cm，器高1.5cm，底径3.6cm，37は口径6.4cm，器高1.5cm，底径4.8cmである。口縁部は斜め上方に上がり，36の口縁部は比較的長い。底部外面は回転糸切り底で，器面は回転ナデ調整である。(P－101から26・36，P－102から27・28，P－103から29，P－104から30，P－105から31，P－106から32，P－107から33，P－108から34，P－109から35，P－110から37がそれぞれ出土している。)

東播系須恵器（Fig.37－38）

こね鉢で，口縁部が残存する。口縁部は斜め上方に上がり，端部を上下に肥厚する。器面は回転ナデ調整が施され，端部には自然釉がかかる。(P－111)

白磁（Fig.37－39）

小形の碗で底部を欠く。口縁部は外上方に外反気味に上がり，端部近くで外傾する。器面には灰白色釉が施釉され，口唇部付近は釉剝ぎがみられる。(P－112)

土製品（Fig.37－40～42）

紡錘形の土錘で，3点とも端部が欠損するが長さは4cm前後とみられ，幅1.4～1.5cm，孔径0.3cmである。(P－113から40，P－114から41，P－115から42がそれぞれ出土している。)

石製品（Fig.37－43・44）

43は柱状片刃石斧で刃部が欠損する。石材は緑色片岩である。44は扁平片刃石斧の未製品とみられ，部分的に研磨痕が残る。石材は粘板岩である。(P-116から43，P-117から44がそれぞれ出土している。)

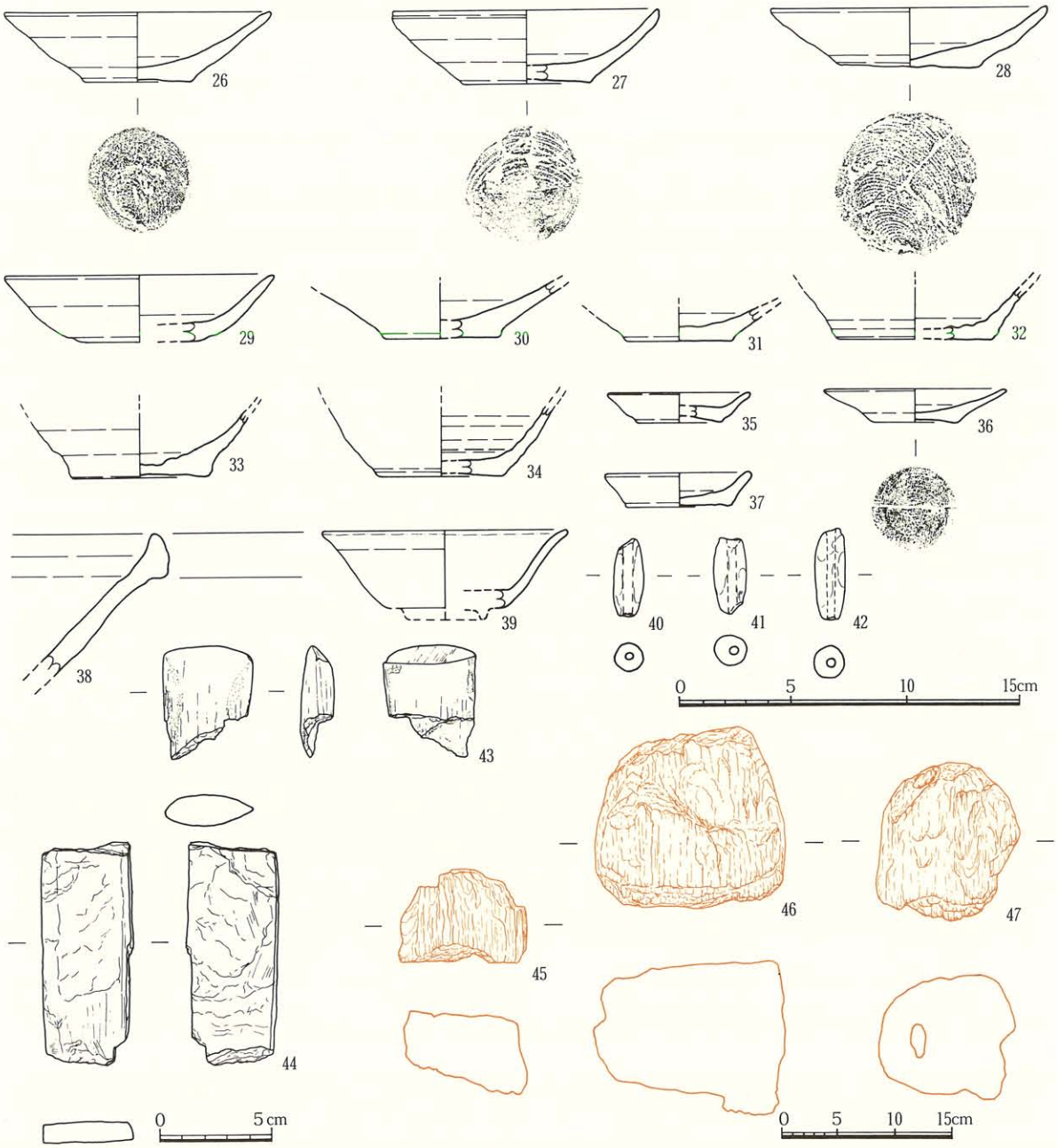


Fig. 37 ピット出土遺物実測図

木製品（Fig.37－45～47）

3点とも柱根の一部で，基部が残存するが，腐食し残存状況はあまり良くない。45は残存長8.5cm，最大幅11.1cmで，調整痕は残っていない。46は残存長16.9cm，最大幅17.3cmで底に削った痕が残っている。47は残存長14.2cm，最大幅12.0cmで，調整痕は残っていない。樹種は47がコナラで，他はヒノキとみられる。(P－118から45，P－119から46，P－120から47がそれぞれ出土している。)

2. B区

第1次調査のA区の南側に当たり，館を囲む溝跡と館の西側が含まれる。掘立柱建物跡8棟，塀跡3列，土坑5基，溝跡7条及び畑の痕跡ではないかとみられる畝状遺構8条などが検出されている。

(1) 掘立柱建物跡

SB－201

調査区南部で検出した梁間1間（2.50m），桁行2間（3.20～3.30m）とやや歪みのある東西棟建物跡である。SD－101・102と重なっている。棟方向はN－50°－Wである。柱間寸法は梁（南北）が2.50mで，桁行（東西）が1.50～1.70mと区々である。柱穴は径30cm前後の円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器の細片1点があったのみで，復元できた遺物はなかった。

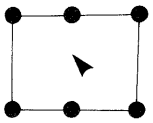


Fig. 38　ＳＢ－201

SB－202

調査区南部で検出した梁間2間（3.70m），桁行3間（6.10m）南北棟建物跡で，南から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。棟方向はN－25°－Wである。柱間寸法は梁（東西）が1.60～2.10mで，桁行（南北）が1.90m，2.00m，2.20mと区々である。柱穴は径約35cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は礫混じりの黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックも若干含んでいた。復元できた遺物はなかったが，常滑の甕の破片と染付片が1点ずつ出土している。

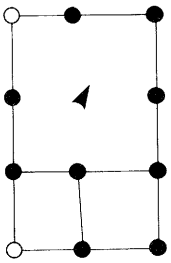


Fig. 39　ＳＢ－202

SB－203

調査区中央部で検出した梁間2間（3.70～4.10m），桁行2間（4.00m）とやや歪みのある南北棟建物跡で，南妻の柱穴1個が未検出である。SB－204と重なっている。棟方向はN－27°－Wである。柱間寸法は梁（東西）が1.80mと1.90mで，桁行（南北）が1.90～2.10mと区々である。柱穴は径30cm前後の円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は礫混じりの黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックも若干含んでいた。出土遺物には土師質土器の細片2点がみられたが，復元できたものはなかった。

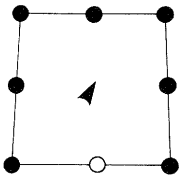


Fig. 40　ＳＢ－203

SB－204

調査区中央部で検出した梁間1間（2.60m），桁行2間（4.00m）の身舎に東庇が付く南北1間（2.60m），東西3間（5.10m）の東西棟建物跡で，北側柱の柱穴1個が未検出である。SB－203・205と重なって

いる。棟方向はN－50°－Eである。柱間寸法は梁（南北）が2.60mで，桁行（東西）が1.90mと2.10mであり，庇幅は1.10mである。柱穴は径30cm前後の円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は礫混じりの黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックも若干含んでいた。出土遺物には土師質土器の細片が1点みられたのみで，復元できたものはなかった。

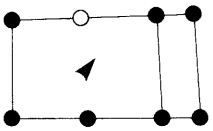


Fig. 41 ＳＢ－204

SB－205

調査区中央部で検出した梁間1間（2.50m），桁行2間（3.50m）の東西棟建物跡である。SB－203と重なっている。棟方向はN－65°－Eである。柱間寸法は梁（南北）が2.50mで，桁行（東西）が1.70mと1.80mある。柱穴は径25～35cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は礫混じりの黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックも若干含んでいた。出土遺物は皆無であった。

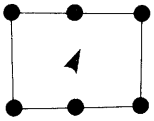


Fig. 42 ＳＢ－205

SB－206

調査区中央部北よりで検出した梁間2間（3.80m），桁行3間（4.80m）の身舎に南庇の付く南北3間（5.10m），東西3間（4.80m）の東西棟建物跡で，北側柱の柱穴1個が未検出である。SB－207と重なっている。棟方向はN－64°－Eである。柱間寸法は梁（南北）が1.70～2.10mで，桁行（東西）が1.30～1.80mと区々であり，庇幅は1.30mである。柱穴は径20～35cmの円形で，柱径は10cm前後と推定される。柱穴の埋土は礫混じりの黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックも若干含んでいた。出土遺物には土師質土器片が2点みられたのみで，復元できたものはなかった。

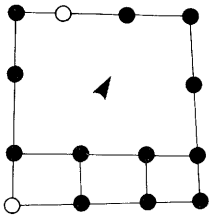


Fig. 43 ＳＢ－206

SB－207

調査区中央部北よりで検出した梁間2間（4.70m），桁行4間（8.30m）の南北棟建物跡で，南から2間目の柱通りに間仕切り柱が立つ。また，南妻の柱穴1個と西側柱の柱穴1個が未検出である。SB－206と重なっている。棟方向はN－26°－Wである。柱間寸法は梁（東西）が2.30mと2.40mで，桁行（南北）が2.00～2.20mと区々である。柱穴は径40cm前後の円形で，柱径は15cm前後と推定される。柱穴の埋土は礫混じりの黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックも若干含んでいた。出土遺物には土師質土器の細片1点と須恵質土器片1点があったのみで，復元できたものはなかった。

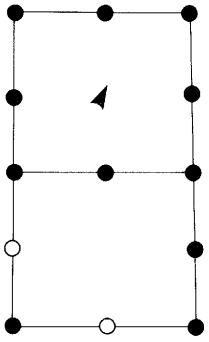


Fig. 44 ＳＢ－207

SB－208

調査区北部で検出した梁間2間（3.95m），桁行2間（4.80m）の東西棟建物跡で，東妻の柱穴1個が未検出である。SB－207の北隣り。棟方向はN－65°－Eである。柱間寸法は梁（南北）が1.80mと2.15mで，桁行（東西）が2.20～2.60mと区々である。柱穴は径30～35cmの円形で，柱径は15cm前後と推定される。柱穴の埋土は礫混じりの黒褐色粘質土で，黄褐色火山灰土粒と小ブロックも若干含んでいた。出土遺物は皆無であった。

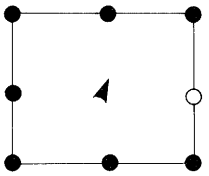


Fig. 45 ＳＢ－208

(2) 塀跡及び柵列

SA－201

調査区中央部南よりで検出した東西塀（N－56°－E）である。SB－203の南隣りに位置する。3間分（6.30m）を検出し，柱間は1.90mと2.20mである。柱穴は径20～25cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SA－202

調査区中央部で検出した南北塀（N－27°－W）である。SB－203の西隣りに位置する。3間分（5.40m）を検出し，柱間は1.50m，1.60m，2.30mである。柱穴は径約20cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物は皆無であった。

SA－203

調査区北部で検出したL字形の塀で，位置関係からSB－208に伴う可能性が考えられる。4間分（9.00m）を検出し，柱間は1.70m，2.30m，2.50mである。柱穴は径約25cm，柱径は10cm前後とみられる。柱穴の埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒と小ブロックを若干含むものであった。出土遺物には土師質土器の細片3点があったのみで，復元できたものはなかった。

(3) 土坑

SK－201

調査区中央部で検出した舟形土坑で多数のピットに掘り込まれていた。長辺4.5m以上，短辺0.8～0.87m，深さ22cmで，底面はほぼ平坦で，南端に平場を有し，断面は逆台形を呈す。長軸方向はN－61°－Eである。埋土は灰黒色粘質土に黒ボク，黄褐色火山灰土，黄褐色砂性粘質土のブロックを多量に含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK－202

調査区中央部南よりで検出した不整方形土坑で，ピット1個が北壁に掘り込まれていた。長辺1.06m，短辺0.90m，深さ15cmで，底面はほぼ平坦で，断面は逆台形を呈す。長軸方向はN－35°－Wである。埋土は暗褐色粘質土に黒ボクの小ブロックを幾分含むものであった。遺物には土師質土器の細片が6点あったのみで，復元できたものはない。

SK－203

調査区北部で検出した不整楕円形土坑で集石を伴っていた。ピット1個が北西壁に掘り込まれていた。長径1.24m，短径0.94m，深さ8cmで，底面はほぼ平坦で，断面は逆台形を呈す。長軸方向はN－4°－Eである。埋土は暗褐色粘質土であった。出土遺物は皆無であった。

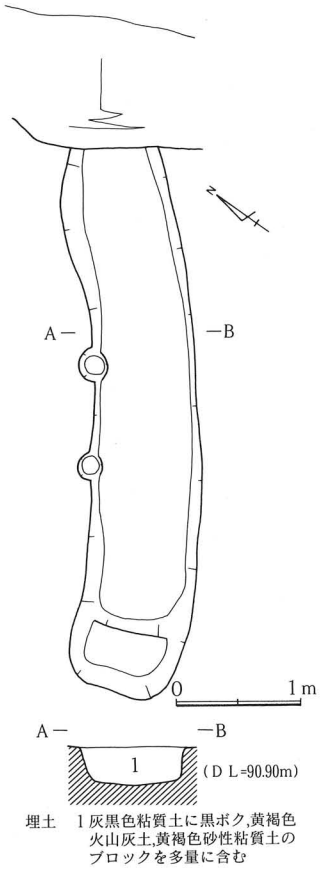


Fig. 46　SK－201

SK－204

調査区北部で検出した不整方形土坑で，SD－205を切って掘り込まれていた。長辺3.02m，短辺1.08m，深さ12cmで，底面はほぼ平坦で，断面は逆台形を呈す。長軸方向はN－32°－Wである。埋土は暗褐色粘質土であった。遺物には土師質土器の細片が2点あったのみで，復元できるものはなかった。

SK－205

調査区北部で検出した方形土坑である。長辺2.1m，短辺1.7m，深さ31cmで，底面はほぼ平坦で東側に一段高い平場を有す。断面はほぼ逆台形を呈す。長軸方向はN－62°－Wである。埋土は2層に分層され，1層が灰色粘質土に黄色砂性粘質土の小ブロックを含むもので，2層が暗灰色粘質土であった。出土遺物は皆無であった。

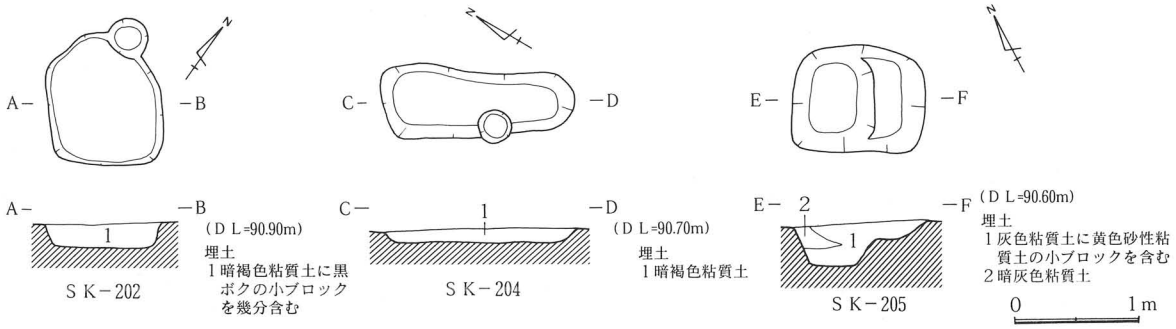


Fig. 47　ＳＫ－202・204・205

（4）溝跡

SD－201

調査区南部で検出した南北溝で，第1次調査の際のSD－102に繋がり，館跡の内側の区画をなす最初の溝である。幅60～80cm，深さ35～38cmで基底面はほぼ平坦であり，約8.0mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土の小ブロックを若干含むものであった。遺物には土師質土器片が比較的多く見られ，13点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.50－6～14）

6～10は杯である。6以外は口縁部を欠く。6は口径12.4cm，器高4.7cm，底径6.2cmで，口縁部は外上方にほぼ真直ぐ上がり，端部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，内外面は回転ナデ調整である。7～10も形態的にはほぼ同じである。底部外面は回転糸切り底で，8には板状圧痕

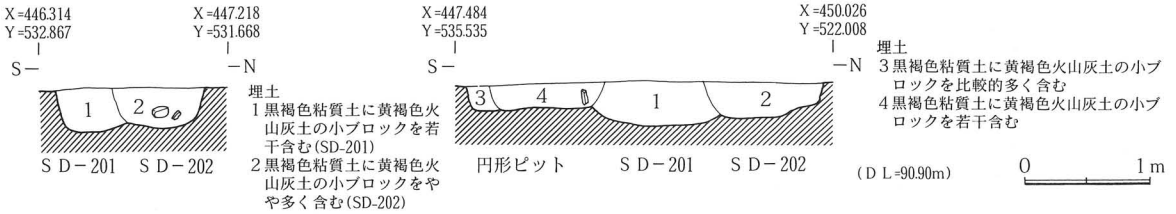


Fig. 48　ＳＤ－201・202

が残る。内面は回転ナデ調整で，外面は未調整となっている。11～14は小皿である。11は口径5.9cm，器高1.5cm，底径3.7cm，12は口径6.8cm，器高1.6cm，底径4.4cm，13は口径5.8cm，器高1.7cm，底径4.5cm，14は口径6.5cm，器高2.0cm，底径5.0cmである。口縁部は短く外上方を向く。13と14の口縁部の立ち上がりはきつい。底部外面はすべて回転糸切り底で，12の内外面には回転ナデ調整が施される。13～14は器面が摩耗しており，調整は不明である。

東播系須恵器（Fig.50－15）

こね鉢の口縁部である。口縁部は外上方に上がり，端部を上方に拡張する。口唇部から内面にかけて回転ナデ調整，外面にはナデ調整が施される。

青磁（Fig.50－16）

碗で，口縁部の一部が残存する。口縁部外面には鎬蓮弁文が施され，器面には灰緑色釉を施釉する。

土製品（Fig.50－17）

紡錘形の土錘であり，両端が欠損する。残存長4.0cm，幅1.5cm，孔径0.3cmである。

石製品（Fig.50－18）

平たい河原石を使用した砥石である。部分的に欠損するが，両面に使用痕が残る。全長31.5cm，全幅22.0cm，全厚7.0cm，重量は7,700gである。

SD－202

調査区南部で検出した南北溝で，第1次調査の際のSD－103に繋がり，館跡の内側の区画をなす拡張後の溝である。幅80～90cm，深さ28～32cmで基底面はやや北に傾斜しており，約9.2mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土の小ブロックを若干含んでおり，SD－201の埋土とほとんど変わらないが，黄褐色火山灰土の量がやや多い点が異なる。遺物にはSD－201に比べ少なく，土師質土器片などが僅かに出土した程度で，復元できたのは1点であった。

出土遺物

青磁（Fig.50－19）

碗で，口縁部を欠く。体部は外上方に上がっており，底部は削り出し高台である。器面には濃緑色釉が施釉され，畳付から内側は釉剝ぎが行われる。

SD－203

調査区南部で検出した南北溝で，第1次調査の際のSD－104に繋がり，館跡の外側の区画をなす溝である。幅80～90cm，深さ20～22cmで基底面はやや北に傾斜し，約10.1mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土はSD－201・203と同じく黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土の小ブロックを僅かに含むものであった。遺物には土師質土器片数点，常滑片2点，東播系須恵器片1点などがみられたが，復元できたのは1点であった。

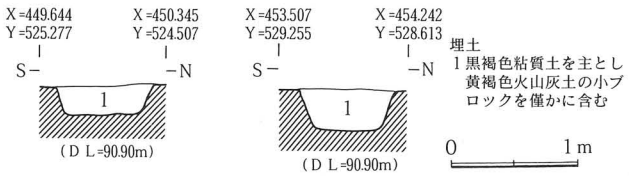


Fig. 49　SD－203

出土遺物

瀬戸系（Fig.50－20）

四耳壷で，肩部と頸部が残存している。肩部は肩が張り，4方に把手が付くものとみられる。頸部は肩部から大きく屈曲し，外上方に外反気味にのびている。肩部外面には緑色の釉が施釉される。

SD－204

調査区北部で検出した南北溝である。北側ではSB－205の南側柱の柱穴が掘り込まれていた。幅30～60cm，深さ16cm前後で，約7.0mを検出した。断面は逆三角形状を呈する。埋土は暗褐色粘質土であった。遺物は皆無であった。

SD－205

調査区北部で検出した南北溝で，第1次調査の際のSD－118に繋がる。幅80～90cm，深さ20～22cmで基底面はやや北に傾斜し，約10.1mを検出した。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土を主とし，黄褐色火山灰土粒及び小ブロックはほとんど含まないものであった。出土遺物は皆無であった。

SD－206

調査区南部で検出した細長い南北溝である。幅約20cm，深さ7cm前後で基底面は約8cmの比高差で北に傾斜し，約5.0mを検出した。断面は舟底形を呈する。埋土は灰色粘質土を主とし，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SD－207

調査区中央部北よりで検出した細長い東西溝である。幅約20～25cm，深さ5cm前後で基底面は若干北に傾斜し，約4.0mを検出した。断面は舟底形を呈する。埋土は灰色粘質土を主とし，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

（5）ピット

多くが建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられる。掘方は大半が円形で，径20～40cm，深さは20～40cmで，径20～30cm，深さ30cm前後のものが多く，A区に比べ全般に規模が小さい。これは遺構の大半が館外であることに起因するものとみられる。埋土は黒褐色粘質土のものが多く，黄褐色火山灰土粒を混入した柱穴もみられた。また，一部には畝状遺構と同じく灰色粘質土を主とするものもみられた。

また，第1次調査の際A区で，多く検出された径70cm前後の円形のピットはSD－201・202の南側，館の内側に多くみられたが，SD－203の北側，館の外側ではほとんど見られなかった。

出土遺物には土師質土器などの細片がみられたが，復元できたものはなかった。

（6）畝状遺構

SF－201

調査区中央部で検出した南北の畝状遺構で，SF－202・203の西約1mのところに位置する。遺構は

溝状をなし，幅20～30cm，深さ2～3cmで，約11.2mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は貫入のはいった京焼系陶器の細片が1点みられた。

SF－202

調査区中央部で検出した南北の畝状遺構で，SF－204の西約1.2mのところに位置する。遺構は溝状をなし，幅30～35cm，深さ4cm前後で，約6.0mを検出した。位置関係からみてSF－203と繋がっていたものとみられる。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SF－203

調査区中央部南よりで検出した南北の畝状遺構で，SF－205の西約1.2mのところに位置する。遺構は溝状をなし，幅35cm前後，深さ3～4cmで，約3.4mを検出した。位置関係からみてSF－202と繋がっていたものとみられる。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SF－204

調査区中央部で検出した南北の短い畝状遺構で，SF－206の西約1.2mのところに位置する。遺構は溝状をなし，幅約30cm，深さ3cm前後で，約1.8mを検出した。位置関係からSF－205と繋がっていたものとみられる。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SF－205

調査区中央部やや南よりで検出した南北の畝状遺構で，SF－206の西約1.2mのところに位置する。遺構は溝状をなし，幅30～40cm，深さ4cm前後で，約4.5mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SF－206

調査区中央部で検出した南北の畝状遺構で，SF－207の西約1.2mのところに位置する。遺構は溝状をなし，幅30～40cm，深さ3～4cmで，約9.4mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SF－207

調査区中央部で検出した南北の畝状遺構で，SF－208の西約1.2mのところに位置する。遺構は溝状をなし，幅約35cm，深さ2～8cmで，約7.8mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は磁器が1点あった。

出土遺物

陶器（Fig.50－21）

天目茶碗の口縁部の破片で，やや内湾気味に上がる口縁部は端部で小さく外傾し，丸く仕上げている。内外面には茶色の鉄釉が施釉される。19世紀以降のものとみられる。

SF－208

調査区中央部で検出した南北の畝状遺構で，SF－207の東約1.2mのところに位置する。遺構は溝

状をなし，幅40～45cm，深さ3～4cmで，約2.6mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は灰色粘質土で，黄色砂性粘質土粒を僅かに含んでいた。出土遺物は皆無であった。

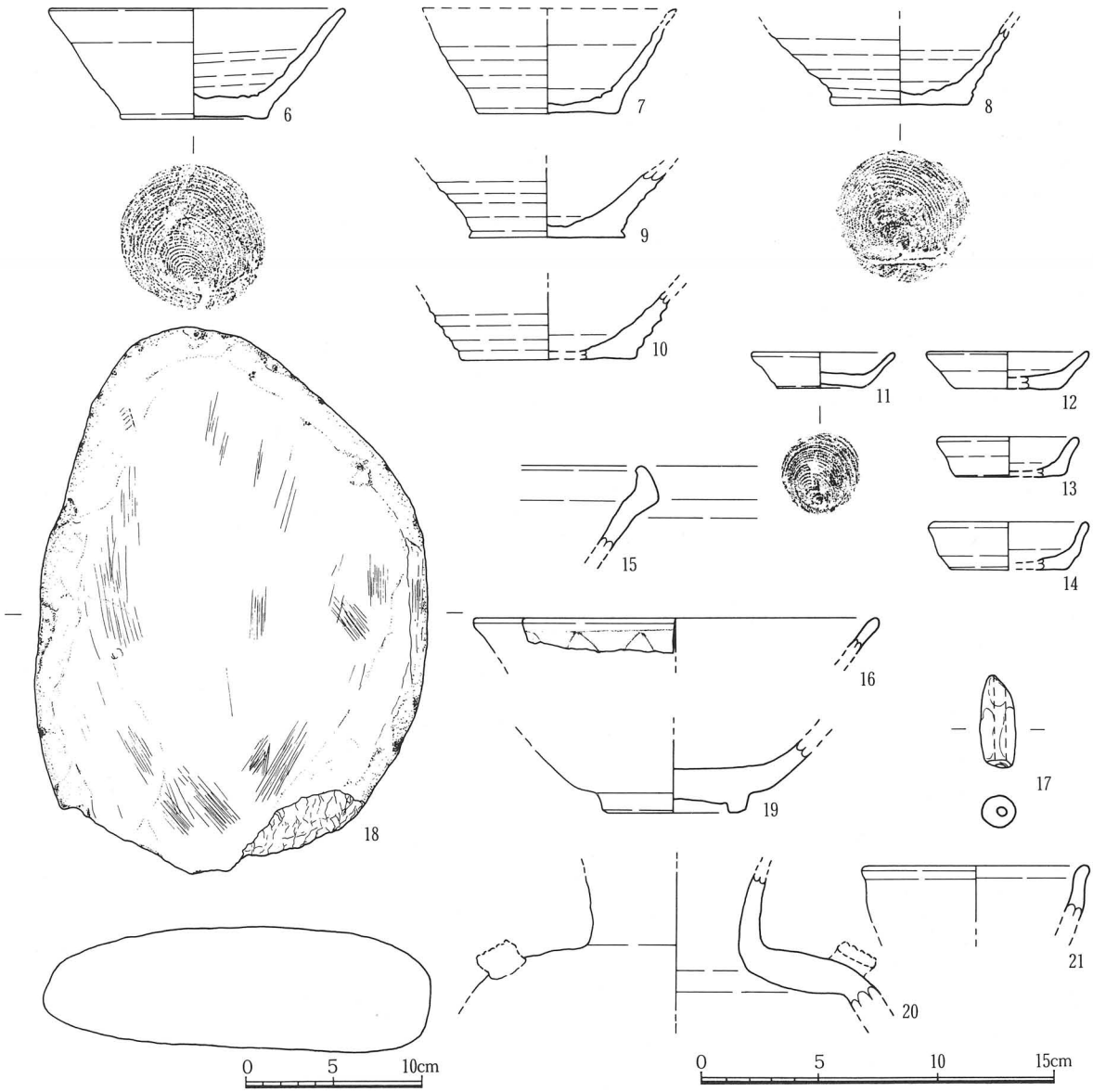


Fig. 50 溝跡，畝状遺構出土遺物実測図

Tab. 5 岩井口遺跡 掘立柱建物跡計測表（第2次調査）

遺構番号	規模					面積 (m²)	棟方向 (Nは真北)	備考
	梁 × 桁 (間) (間)	梁間m	×	桁行m	柱間寸法 梁m	柱間寸法 桁m		
SB－101	1 × 3	2.10	×	5.60	2.10	1.80, 2.00	11.8	N－56° －W	
SB－102	2 × 4	3.90	×	7.60	1.80, 2.10	1.80～2.10	29.6	N－55° －W	
SB－103	2 × 3	3.60	×	5.40	1.80	1.80	19.4	N－45° －W	
SB－104	2 × 3	3.60	×	5.30	1.80	1.50～2.00	19.1	N－55° －W	
SB－105	2 × 2	4.20	×	4.60	2.00, 2.20	2.20～2.50	19.3	N－56° －W	
SB－106	2 × 2	3.30	×	3.40	1.50, 1.80	1.50, 1.90	11.2	N－56° －W	
SB－107	1 × 2	1.80	×	3.10	1.80	1.20～1.90	5.6	N－56° －W	
SB－108	1 × 1	1.80	×	2.10	1.80	2.10	3.8	N－32° －E	
SB－109	1 × 2	3.00	×	4.50	3.00	2.20, 2.30	13.5	N－55° －W	
SB－110	2 × 2	2.80	×	3.00	1.20, 1.60	1.50	8.4	N－48° －W	
SB－111	2 × 2	3.30	×	3.80～3.90	1.40, 1.65	1.80～2.00	12.7	N－42° －E	
SB－112	1 × 2	1.80～2.00	×	2.00～2.20	1.80, 2.00	1.10, 2.00	4.0	N－88° －W	
SB－113	2 × 4	3.30	×	7.40～7.50	1.65	1.50～2.30	24.6	N－49° －W	
SB－114	2 × 4	3.60	×	7.50	1.80	1.80～2.00	27.0	N－47° －W	
SB－115	2 × 3	5.10	×	7.50	3.00	2.00～2.80	38.3	N－37° －W	西庇
SB－116	2 × 2	3.30	×	4.20	1.50～1.80	1.90～2.30	13.9	N－46° －W	
SB－117	2 × 3	3.40～3.60	×	6.30	1.60～2.00	1.10～3.00	22.1	N－43° －E	
SB－118	1 × 3	2.10～2.25	×	6.50	2.10, 2.25	1.80～2.80	14.1	N－45° －W	
SB－119	2 × 5	3.10	×	9.60	1.35～1.60	1.80～2.00	29.8	N－54° －W	
SB－201	1 × 2	2.50	×	3.20～3.30	2.50	1.50～1.70	8.1	N－50° －W	
SB－202	2 × 3	3.70	×	6.10	1.60～2.10	1.90～2.20	22.6	N－25° －W	
SB－203	2 × 2	3.70～4.10	×	4.00	1.80, 1.90	1.90～2.10	15.6	N－27° －W	
SB－204	1 × 3	2.60	×	5.10	2.60	1.90, 2.10	13.3	N－50° －E	東庇
SB－205	1 × 2	2.50	×	3.50	2.50	1.70, 1.80	8.8	N－65° －E	
SB－206	3 × 3	5.10	×	4.80	1.70～2.10	1.30～1.80	24.5	N－64° －E	南庇
SB－207	2 × 4	4.70	×	8.30	2.30, 2.40	2.00～2.20	39.0	N－26° －W	
SB－208	2 × 2	3.95	×	4.80	1.80, 2.15	2.20～2.60	19.0	N－65° －E	

Tab.6 岩井口遺跡 塀跡計測表（第2次調査）

遺構番号	規模			方向 (Nは真北)	備考
	柱穴数	全長 m	柱間距離 m		
SA－101	4	4.45	1.15～1.70		L字形
SA－102	5	5.60	1.30～1.50	N－30° －E	
SA－103	4	4.00	1.20, 1.60	N－37° －W	
SA－104	4	5.00	1.30～1.90	N－44° －W	
SA－201	4	6.30	1.90, 2.20	N－56° －E	
SA－202	4	5.40	1.50～2.30	N－27° －W	
SA－203	5	9.00	1.70～2.50		L字形

第Ⅴ章　考察

本章では，岩井口遺跡について，第1次調査の結果[1]を踏まえた上で今回新たに検出された遺構，遺物から導き出される結果を加味しその性格と存続した時代について考え，さらに館跡の位置付けとその意義についても考察してみたい。なお，岩井口遺跡は大きく南北2ヶ所から遺構が検出されており，南側からは中世の溝に囲まれた館跡を中心に弥生時代，近世の遺構も確認され，北側からは中世の遺構がそれぞれ確認されている。遺跡の面積は南側が約9,400㎡，北側が約3,600㎡で，全体では約13,000㎡に及ぶものと考えられる。

1. 岩井口遺跡の性格とその時代

岩井口遺跡については平成4年度に第1次調査が実施されており，弥生時代の遺構と中世の館（屋敷）跡が確認されている。第2次調査に当たる今回の調査では，新たに近世の遺構も確認することができた。一方，弥生時代については遺物が数点出土している程度で，明確に弥生時代の遺構として位置付けられるものは確認できなかったが，SK－201などはその形状と埋土からみて弥生時代の貯蔵穴である可能性も考えられる。

(1) 弥生時代

前述のように今回の調査では弥生時代の遺物は散見されたが，明確な遺構は確認できなかった。そのため第1次調査の結果を踏まえ，岩井口遺跡全体をみてみることにする。

まず，前期新段階に属するとみられる遺物が細片であるが確認されており，この段階になって初めて人がこの地に住み着いたものと推察される。この時期の集落は遺構数が少ないことから比較的小規模なものであったと判断される。これら遺構は主に遺跡の北東部で検出されている。引き続き中期の段階にも数は少ないが，遺物では扁平片刃石斧や柱状片刃石斧など，遺構では舟形土坑などが検出されており，人の営みを推察することができる。町内からこの時期の石包丁も発見されており，集落の拡がりの一端をみることができる。弥生時代後期後半から終末期にかけては県内一円に集落が形成されるのに呼応して当遺跡でも終末期と考えられる竪穴住居跡やピットなどが検出されている。検出された住居跡が1軒と最小単位であり，全容については推測の域をでないが，全体的にみても小規模のものと考えられ，二ノ部遺跡など母村的集落から分村したものではなかろうか。これら集落もこの期を境に移動したものとみられ，忽然と人の痕跡が絶える。これも県内一円に見られる現象であり，正に古墳時代の到来を暗示しているようである[2]。ただ，集落がどこに移動して行ったか明確になっておらず，古墳時代の様相解明とともに今後の研究課題として残っている。県内に前期古墳がほとんど存在しない特異な現状ともリンクして考えなければならないであろう。なお，町内では前期古墳はもとより古墳とみられるものは1基も確認されていない。

(2) 中世

岩井口遺跡を象徴する時代で，第1次調査では13世紀から14世紀にかけての溝に囲まれた館（屋敷）跡が確認されている。今回はその南側約三分の一を調査し，ほぼ館の全容を推察することができるようになった。ただし，南側を区画するとみられる溝跡は未検出となっており，現在の県道（改良前の県道）の下に残存しているものと推察される。

まず，今回確認された遺構についてみてみよう。A区からは館内の建物としてSB－101～109を確認した。この内SB－106～109は規模的に小さく，納屋等付随的な性格の建物とみることができるのではなかろうか。一方，SB－101～105は館の一角を担っていた建物とみえて，柱間寸法，柱穴の規模等館外の建物に比べ大きくなっている。SB－101は館内の建物としては珍しい梁間が1間の建物であるが，柱穴が径50cmと大きく，柱間距離も6～7尺（1.80～2.10m）としっかりした造りであり，蔵などの倉庫ではないかとみられる。この建物の北側柱の柱穴と重なって建てられたSB－102は東から1間目と2間目の柱通りに間仕切り柱が立つもので，北側約8mのところに位置する第1次調査の際検出したSB－106～108などと似た構造となっている。また，SB－101・102・104～106は棟方向がほぼ同じであることから同じ基準での建替えと考えることができる。SB－103とSB－104は規模的にはほぼ同じであるが，棟方向に15度の違いがみられ，時期の違いとみてとることができる。館内の建物は原則として館を囲む溝に沿った造りとなっており，棟方向は真北に対し西に約55度振っている。このことからすると館の中では新しい時期の建物である可能性も考えられる。

館の南東側では10棟の建物が検出されているが，出土遺物は館内に比べて少ない。しかし，建物自体は館内の建物に比べても遜色なく，また，SD－101（第1次調査のSD－106に繋がる）や第1次調査のSD－301によって区画された部分に規則的に配置されていることからみると館に次ぎ重要な部分であったものと推察される。SB－114～119は柱間寸法が6～7尺（1.80～2.10m）と大きく，SB－115のように庇を持つ建物もみられることから第1次調査の際館外の北東部で検出した建物群とは異質なものと考えられ，後者が領主に仕える下人の住いとした場合，前者は有力な家人の住いとみることができるのではなかろうか。館自体が南東側を向いて建てられていたと考えられ，その南前面に有力家人を配していたものと判断される。他方，館の北西側では今回7棟の建物跡を検出したが，遺物はほとんど出土しておらず，館内とはやや様相が異なるようである。建物の規模をみると，柱穴などが一回り小さい小規模な建物がみられる一方で，SB－207のように39m²の広さを有する建物やSB－206のように庇を持つ建物がみられ，前述の第1次調査の際館外の北東部で検出した建物群ともやや様相を異にする。丁度，館の裏手に当たることから背面の防御を兼ね備えた部分とも考えられ，それを担った家人の住いとみることもできるのではなかろうか。

このように今回の調査では館内の建物群とその前後で家人の住いではないかとみられる建物群を確認することができた。この他にも建物跡として復元できなかったが，館内では数多くの柱穴が検出されている。建物の切り合い関係も多く，前述のSB－102～105は4時期の変遷が考えられ，100年近い存続時期が推察される。特に，館中心部では無数の柱穴が存在することから何度も建替えが行われたものとみられ，少なくとも100年以上存続したものと考えられる。他方，館外に目を転じた場合，館内に比べ柱穴の数が少なく，建替えが行われた痕跡も僅かで，領主と家人との違いを如

実に表しているものといえよう。

次に，今回出土した遺物から館の存続時期を再度検討してみたい。第1次調査の時のようにまとまって多量に出土していないが，時期の明確な搬入品が伴出しており，存続時期をほぼ推測することが可能である。SB－101出土の青磁の碗（Fig.31－8）は龍泉窯系のものとみられ，外面には鎬蓮弁文が施されており，ほぼ13世紀代に該当さすことができよう。伴出している土師質土器（Fig.31－6）は第1次調査の際SD－102から多量に出土したものと同じ形態のもので，13世紀後半から14世紀初めにかけてのものとみられている。SB－108から出土している瀬戸系の四耳壺は古瀬戸前Ⅱ期[3]に該当するものとみられ，13世紀第2四半期の範疇に入るものと考えられる。同じく，SD－203出土の瀬戸系の四耳壺もほぼ同形態であり，同時期のもの[4]と考えてよいであろう。SB－117出土のこね鉢（Fig.31－18）は東播系須恵器とみられ，第1次調査の際も比較的よく見かけられた搬入品で，13世紀後半から14世紀前半の時期[5]が考えられる。P－111出土のこね鉢（Fig.37－38）も同形態であり，ほぼ同時期のものとみて大過なかろう。また，SD－201出土の東播系須恵器のこね鉢（Fig.50－15）や青磁の碗（Fig.50－16），SD－202出土の青磁の碗（Fig.50－19）も前述のものとほぼ同じ範疇に属するものと考えられる。一方，今回も瓦器が全く出土しなかった。県内の12世紀後半から13世紀にかけての遺跡からは，高台が退化し断面形が逆三角形を呈する形態のものを比較的よく見かけることができる。このことは遺構の中心が13世紀でも後半以降であることを示しているものと考えることができるのではなかろうか。

これら遺物から館の存続時期をみてみると，その成立を13世紀中頃と考えることができ，建物の重複関係を考え合わすと13世紀後半から14世紀代を通して館が機能し，15世紀の早い時期に廃絶したのではなかろうか。

(3) 近世

今回の調査で始めて確認された。確認された遺構はB区で検出した畝状遺構であり，SF－201～208の8条が確認されている。遺構としては溝状をなすもので，幅20～45cm，深さ2～8cm，長さ10m前後でそれぞれが約1.2mの間隔で検出されており，方向としてはすべて真北に対し西に約36度振っている。また，SF－202とSF－203は同じ位置関係にあり，途中が検出されていないが，当初は繋がっていたものとみられる。SF－204とSF－205についても同じことが言えそうである。

このようにしてみると同一方向に6条分が並んで配置されていたことになり，このような形状は畑の形態と捉えることができ，溝状の部分は畝と畝との間の畝間と見ることができるのではなかろうか。結果として当時畝を作る際に削られた畝間のみが残存したものと考えられる。

遺物には，SF－201から出土して京焼系陶器の細片とSF－207から出土した産地不明の近世陶器が1点（Fig.50－21）があり，これらは19世紀以降の所産とみられることからこの畝状遺構もほぼその時期ではなかろうか。埋土が他の遺構と異なり灰色を呈する点もそれを裏付けているものと思われる。この畝状遺構が検出された付近は遺跡の中でも標高の最も高い部分であり，地山が砂礫を多く含む土層であることから水田を作るよりか畑作に向いていたとも考えられる。

2. 館跡の位置付けとその意義

ここでは第1次調査と今回の第2次調査の結果からこの岩井口遺跡の館跡についてまとめた上で，その意義についても考えてみたい。

まず，館の規模をみてみよう。館を取り囲む2条の溝跡を含めたその規模は東西約45m（130尺），南北約45m（130尺）に及び敷地面積は約2,025㎡となり，当時の表記で言えばほぼ一段三十代に相当する。高知空港拡張整備事業に伴って実施された田村遺跡群で検出された「溝に囲まれた屋敷跡」[6]のそれと比較した場合，2,000㎡を上回るものが確認されていないことからするとこの館跡は当時としては比較的規模の大きな屋敷であったものと推測される。さらに，田村遺跡群の「溝に囲まれた屋敷跡」群がそれぞれ単独で構成されているのに対し，この館跡は周辺に付随の建物群を有する特徴がみられる。このことは前者の所有者とは異なる性格の所有者を想定することが可能であり，その際前者の所有者として名主層を中心に細川氏の有力家臣が想定されている[7]ことからして後者の所有者としてやはり在地領主（国人）の名を挙げることができるのではなかろうか。防御的色彩が強いことからもそのことは言えそうである。調査した館を含めた周辺部の面積は4,845㎡であり，未調査部分や標高が低いためすでに削平された部分をも含むと9,000㎡以上になるものと想定され，非常に広い範囲を占有して館を構えていたことが推察できる。

次に館の構成をみてみることにする。前述のように館は北西方向を背にし南東方向を向いた造りとなっており，南西側に隣接する山の裾の形状に左右されたとも考えることができる。中央部に溝で区画した館を配し，右手（南西側）は山で境をなし，背後には土塁を設けていた可能性が考えられる。館の南東前面には溝で区画した建物群を設け，有力家人を配置し，館の背後には防御のための建物群を設置していたものとみられ，そこにも家人を住まわしたものと推測される。他方館の左手の北東部には小規模な建物が多く下人を住まわせていたのではなかろうか。換言すれば，中心部に館（屋敷）の領主（主人），そのまわりに家人（家来），さらに外側に下人という形で配置していたものといえよう。時代背景からしてもこのような防御的色彩の濃い構成をとったものと判断され，館の構成からもこれを当時の在地領主（国人）の館（屋敷）として捉えることができるのではなかろうか。

ここで，館内外の建物がどのような規格，柱間寸法で建てられていたのかみてみたい。まず，館内で単独で検出された建物，SB－115・116（第1次調査のA区）では，梁は1.80m（6尺）と1.50m（5尺）で，前者が多く，桁は1.65m（5尺5寸），1.80m（6尺），1.90m（6尺3寸），2.00m（6尺6寸），2.40m（8尺），2.50m（8寸3尺），2.70m（9尺），3.00m（10尺）と区々となっている。特に，SB－115の桁の柱間寸法はすべて異っており，そこに規格性を見出すことは難しいようである。北に張出を有するSB－113（第1次調査のA区）では，梁が1.80m（6尺）等間隔，桁が1.50m（5尺）と1.65m（5尺5寸）で，張出の出は2.10m（7尺）となっており，規格性を持って建てられたものと判断される。館の中心となる建物，SB－101（第1次調査のA区）では，梁が2.10m（7尺）と2.55m（8尺5寸），桁も同じ寸法となっている。南に隣接するSB－102（第1次調査のA区）では，梁が1.95m（6尺5寸）等間隔，桁は1.75（5尺8寸）～2.30m（7尺7寸）と区々である。このようにしてみてみると確かに規格性を持って建て

られた建物が見られる一方で，規格性がほとんどみられず，梁間全体，桁行全体で長さを合わしたと考えられる建物の方が多いようである。先のSB－101・102の前面にあり，館内で主要な建物の一つに数えられ2度の建替えが行われたとみられるSB－106～108（第1次調査のA区）なども，柱間寸法が区々の部分がみられ，規格性に乏しいと言わざるを得ない。

館外に目を転じてみても，柱穴の径が小さくなる点，柱間寸法が1～2尺短くなる点などを指摘できる以外，SB－201～203（第1次調査のB区）にみられるように梁も桁も区々となっている建物が多く，今回調査したSB－113～117などもその傾向が桁を中心にみられ，梁，桁とも全体で長さを調整したと考えた方が良さそうである。

このように館内外でみられる建物は，一般的な傾向として柱間寸法に制約された形で建物を建てたと見るより全体の長さで調整していたと見た方が良いのではなかろうか。しかし，中には規格性を持った建物もあり，建物の重要度に応じて規格性を持たせたようである。二ノ部遺跡で検出したほぼ同時期の3棟の母屋を見た場合，ほぼ規格性を持った柱間寸法となっていることからもそのことは言えそうである。

最後に，館の所有者について考えてみたい。『長宗我部地検帳』でこの岩井口（長宗我部地検帳では岩井口村）に関する記事をみてみると，天正18年（1590年）当時水田（中下水田）となっているが「土ゐヤシキ」の地名がみられ，丁度この溝に囲まれた館跡が検出された部分の現在の地名は「土井」となっており，『長宗我部地検帳』にみえる順番からしてもその「土ゐヤシキ」に該当するものと考えられる。この「土ゐヤシキ」は天正18年には水田となり存在しないが，かつて土塁を持った屋敷としてその名だけが残ったものと判断される。この斗賀野地区には『長宗我部地検帳』によると5ヶ所に「土居」に関連した地名が見られ[8]，内3ヶ所が天正18年当時屋敷（中下ヤシキ）として残っており，残る2ヶ所，岩井口の「土ゐ」と島田「土ゐ」が水田（上中下田）となっている。岩井口の「土ゐ」はこの館跡と考えられ，島田の「土ゐ」は二ノ部南遺跡に該当するものとみられ現在も「土居ヤシキ」の地名が残っている。二ノ部南遺跡については未調査であり，その実体に迫ることはできないが，『長宗我部地検帳』に記載された面積は一町九段十代であり，岩井口遺跡の範囲が約13,000㎡（一町十七代）と比較しても遥かに広いものである。ただ，すべてが「土ゐ」に関係したものとは考え難く，実際どのような性格，規模であったかは今後の調査を待たざるを得ないであろう。中世のこの時期，『佐伯文書』の中に佐河四郎左衛門入道と度賀野又太郎入道の名が見られ，在地領主（国人）として佐川郷の佐河氏，度賀野庄の度賀野氏の存在が考えられている。丁度，この館が機能した時期と度賀野氏が活躍した時期とが一致する。このことから度賀野庄の入口に位置するこの館跡を度賀野氏の居館であったと考えることも可能であるが，度賀野庄の中心部に位置する島田の「土ゐ」の方が立地的には適しているとも考えられ，島田の「土ゐ」の実体が注目される。ただ，岩井口遺跡は極めて水捌の良い火山灰（鬼界アカホヤテフラ）の上に所在しており，一概に立地だけで云々することはできないのかもしれない。ともかく，この館跡が，在地領主の生活実体に迫る貴重な資料であることには変わりなく，県内では初めて確認された在地領主の館跡でもあり，今後この時代の様相解明には欠くことのできない資料といえよう。ここではこの館の主の候補の一人として度賀野氏の名を挙げることまでで留めておき，その実体については今後の調査と研究

に期待したい。

註

(1) 廣田佳久『岩井口遺跡，二ノ部遺跡・城跡』佐川町斗賀野地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書 佐川町教育委員会　1995.3

(2) 廣田佳久「周辺地域における土師器の様相－1. 南四国の古式土師器－」『研究紀要』第1号 （財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1994.3

(3) 山下峰司『海上遺跡』瀬戸市教育委員会　1992.3
藤原芳祐「瀬戸古窯址群「－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要Ｘ』瀬戸市歴史民俗資料館　1991

(4) (3) に同じ

(5) 岸本一郎「東播磨」『季刊考古学』 特集 須恵器の編年とその時代　第42号　雄山閣　1993.2

(6) 下村公彦「6. 中～近世小結　2. 遺構」『田村遺跡群』第10分冊　高知県教育委員会　1986.3

(7) (6) に同じ

(8) 秋沢繁「第三編　中世・近世」『佐川町史』上巻　佐川町役場　1982

参考文献

『長宗我部地検帳』高岡郡　下の一　高知県立図書館　1963

『大系　日本史　6』小学館　1988

図　版

調査前全景（北より）

調査前全景（南より）

調査区全景（南上空より）

調査区全景（上空より）

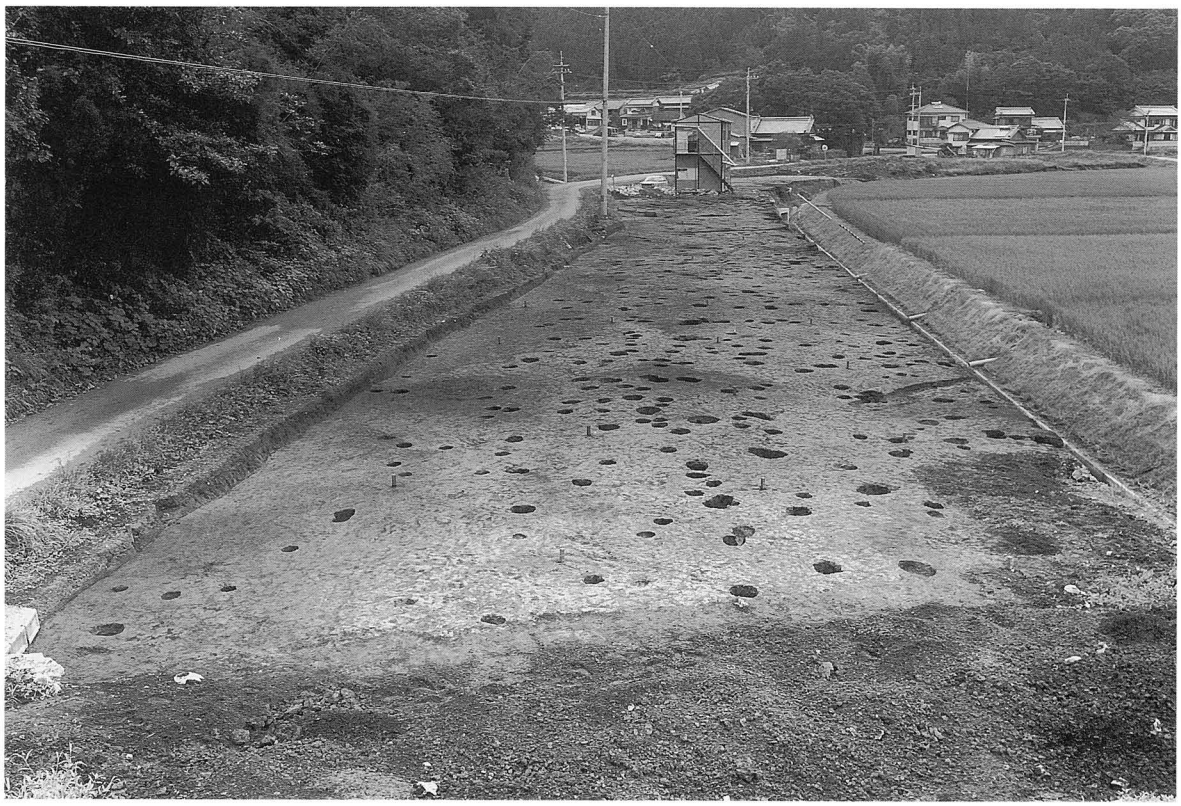
A区　遺構完掘状態（上空より）

B区　遺構完掘状態（上空より）

A区　遺構検出状態（北より）

A区　遺構完掘状態（北より）

A区　遺構検出状態（南より）



A区　遺構完掘状態（南より）

SB－101（北より）

SB－102～104（南より）

SB－106（北より）

SB－107・108（南西より）

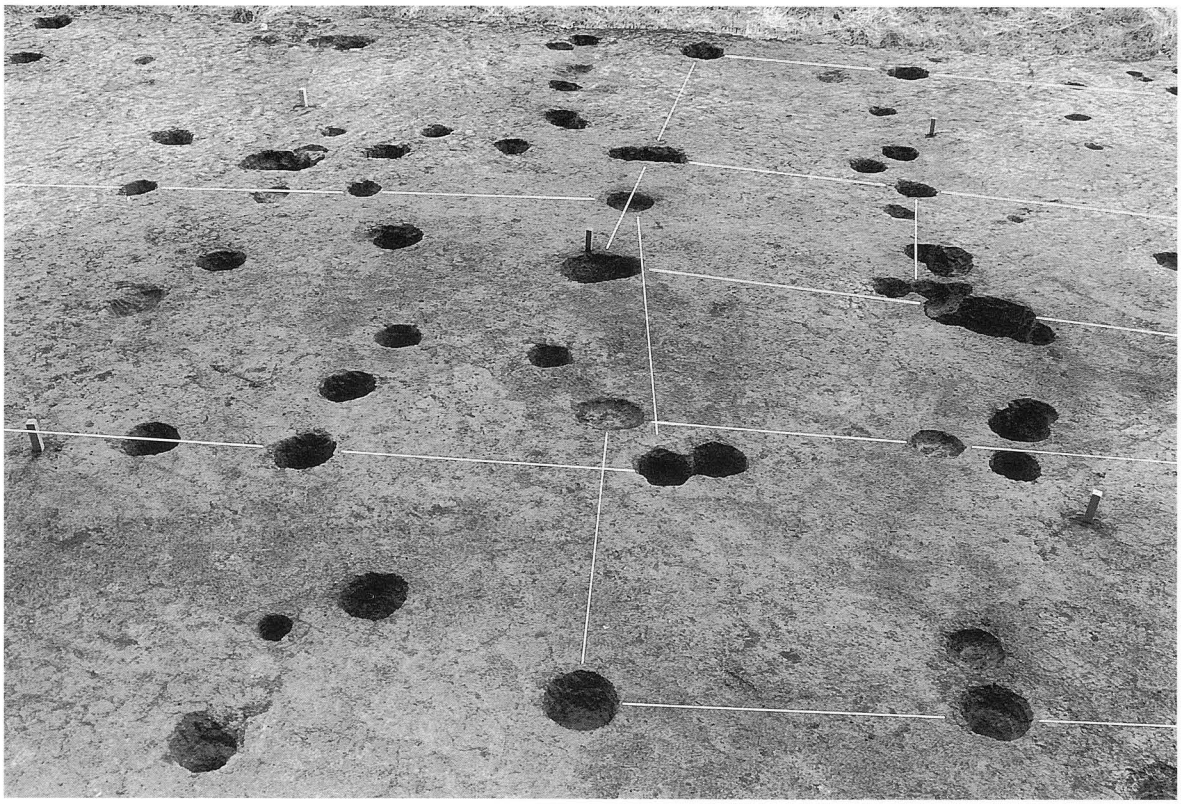
SB－109（南西より）

SB－110，SA－101（南西より）

SB－111（南西より）

SB－113・114（北西より）

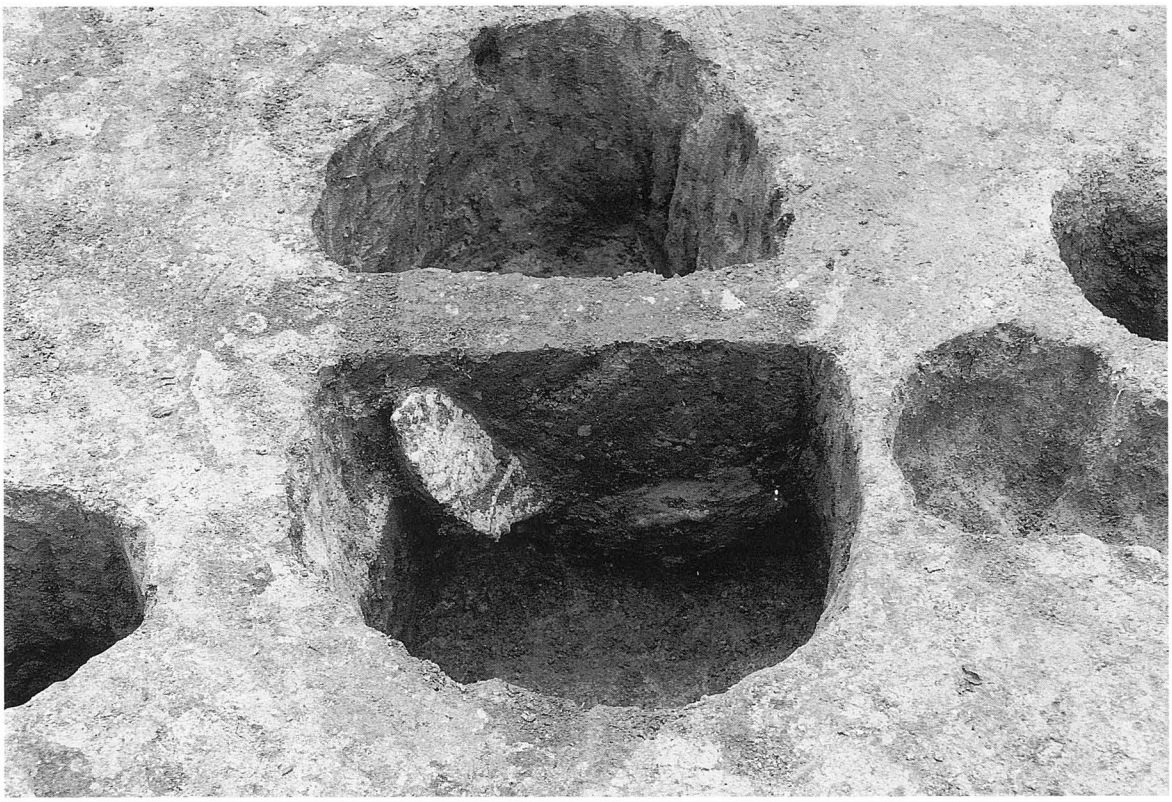
SB－114（南西より）



SB－114・115・118（南西より）

SB－117・119（西より）

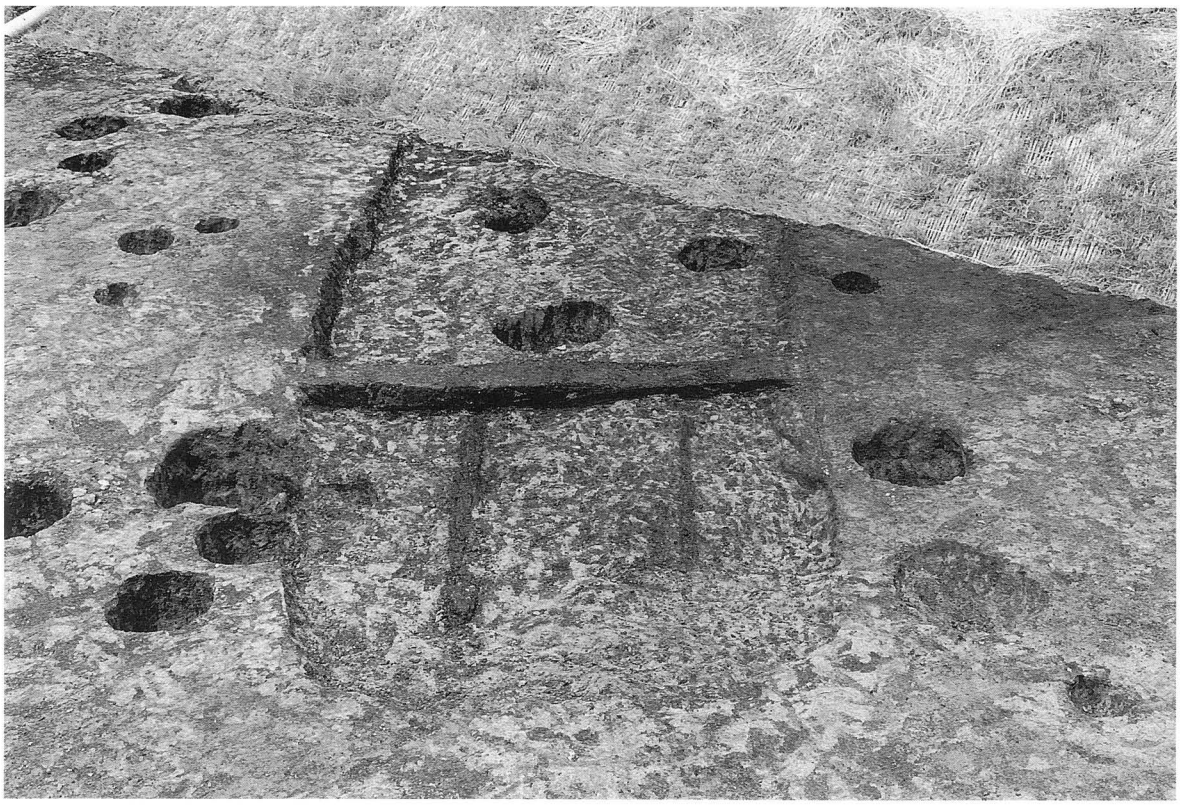
SB－117・119（南より）



SB－101の北東隅の柱穴（北より）

SK－103（南より）

SK－106　検出状態（南より）



SK－106　完掘状態（南より）

SD－101（北より）

SD－103（東より）